コウノトリが舞う里づくり大作戦
ステージ 2
報告書

平成 23 年　3 月

水辺と生き物を守る農家と市民の会

はじめに

コウノトリ「コウちゃん」飛来40周年
記念事業実行委員会

実行委員長　堀江　照夫

平成22年11月6日、7日の2日間にわたり、コウノトリ「コウちゃん」飛来40周年記念事業、「コウノトリが舞う里づくり大作戦　ステージ2」を開催できたことを関係各位に対しまして、御礼申し上げます。また、当日にはご多用のなか、大作戦にご臨席賜りました西川一誠 福井県知事を始め、多数のご来賓各位に対しまして厚く御礼申し上げます。なお、今回の大作戦の開催に当たり共催といたしまして、福井新聞社、NHK福井放送局、越前市にご支援をいただいております。この場を借りて御礼申し上げます。

コウノトリと白山･坂口には決して忘れることの出来ない物語があります。それは、コウノトリ「コウちゃん」の飛来です。しかし、「コウちゃん」はくちばしが折れていたため、悲しいことに治療のため豊岡に送られました。あれから40年の月日が経過しました。当時、白山･坂口地区には約3ヶ月間という短い期間ではありましたが、言葉に表すことの出来ない「コウちゃん」と「住民」の方たちの熱い物語がありました。このたびの40周年記念事業は、これらの想いを如何に未来につなげ、環境を保全していかなければならないかを、皆で考え討議し実践していけるそんな大会であったと思います。私たちの、「コウノトリと再び共に暮らしたい！」という想いは、自然環境を守っていくことに加え、未来に向けての「生きものと共生していける安全安心な里づくり」を目指しているからにほかなりません。

さて、今年は国連で定められた生物多様性の年でもあり、COP10など国内各地で生物多様性保全に係わる色々なイベントが開催されております。そのような中、最近、白山･坂口地区は「コウノトリに選ばれた里」と言う言葉を聞きました。それは白山･坂口地区は「豊かな生物多様性を有している」と言っても過言ではありません。

コウノトリは現代の自然環境について行けるほど力強い鳥類ではないと言われております。こ

のような状況に追い込んだのは私たち人間であります。これからの未来を切り拓く子どもたちに対して、今こそ私たちはこれらの課題に立ち向かわなければならない時期に来ています。 このような重要課題をこの大作戦にご参加していただいた皆様と一緒になって共有し、コウノトリ「コウちゃん」をシンボルとし「人も生きものも元気な里づくり」に取組み、自然環境の保全活動や環境調和型農業の推進の成果を全国に発信していけるものにしたいと思います。

平成 23 年 3 月 22 日

ごあいさつ

越前市長　奈良俊幸

皆さんこんにちは。たくさんの皆さんが大作戦にご参加をいただきまして、まことにありがとうございます。また、堀江委員長を先頭に実行委員会の皆さん並びに福井新聞社、ＮＨＫ福井放送局の皆様方には、本日の大作戦の開催に当たりまして絶大なるご支援、ご協力をいただいたところでございます。心より感謝を申し上げます。さらには、本日のこの大作戦に当たりまして、福井県より西川知事、兵庫県より溝口教育次長、また豊岡市からは中貝市長を初めたくさんのご来賓の皆様方にご臨席を賜ることができました。あわせて厚く御礼を申し上げます。

さて、先ほど来お話がありますとおり、本年はコウノトリ「コウちゃん」が当地に飛来して40年という節目の年であります。また、この「コウちゃん」が豊岡の地で「武生」として大切に育てられ、34年後、残念ながら息を引き取ってから5年という年にもなります。5年前といいますのは、武生市が幕を閉じて越前市が新たに誕生する、そういう節目の年でもございました。ちょうど武生市が57年の長い歴史に幕を閉じたその同じときに、豊岡ではコウノトリ「武生」が息を引き取ったと。私は私どもこの越前市武生とコウノトリの深いつながりを改めて感じる次第でございます。

こうした歴史的な背景も含め、越前市が誕生して以降、特に白山、坂口の西部地区の皆さんが大変熱心に、もう一度コウノトリが飛んできてくれるような、そういうふるさとづくりをしよう、熱心な活動を繰り広げていただきました。最初は、コウノトリまではなかなか無理だろうけれども、とにかく熱心な市民の皆さんの活動を応援したい、そういう気持ちで一緒に市としても取り組みを進めてきました。環境省から里地里山の保全再生地域に指定をされましたので、他の地域にも呼びかけをいたしまして、全国フォーラムを開きましたり、コウノトリを呼び戻すフォーラムを開催いたしましたり、地域の皆さんがコウノトリ呼び戻す農法ということで米づくりに取り組まれ、そうした米の販売など一生懸命応援を続けてまいりました。

大変ありがたいことに、こうした市の取り組みを何度にもわたって多くの方々が熱心に大変大きな激励、ご支援をいただくことができました。まず、福井新聞社がこの白山地区にコウノトリ支局を設けていただきました。里地里山の構想については、ＮＨＫ福井放送局も何度も特集を組んでいただきました。そうした中、まさかと本当に驚きましたけれども、40年ぶりにこの4月にコウノトリ「えっちゃん」が本市に飛来してきました。白山地区の皆さん、坂口地区の皆さんはもちろんでありますけれども、王子保地区に長く滞在をし、王子保地区の皆さんがこの「えっちゃん」を通してコウノトリに対する大変強い関心を持たれ、王子保小学校の子供さんも、えさ場づくりなどたくさんの活動に参加をしてくれました。

こうした活動に大変大きく影響されまして、今度は本来越前市武生の地では最も元祖である矢船町の皆さんが、古い歴史をもう一度皆さんの中で教育を受けながら、矢船の歴史について、コウノトリが9年間も滞在していた、こういうことについて自信を持って話をしてくださるようになってきました。大変大きなコウノトリの取り組みが広がってきたところでございます。

そういった中で私ども最も注目をし、心強い思いをいたしておりますのは、8月23日に私ども福井県の西川知事と兵庫県の知事が対談をされまして、福井県での自然放鳥についての方向性が確認をされた、しかも兵庫県の井戸知事からは、ゆかりのある越前市はどうかと、そういう提案がなされたと8月24日の福井新聞の1面に大きく報じられたところであります。もちろん、これから両県あるいは文化庁を含めさまざまな方々のご尽力によって、その方向に向かってお取り組みがなされるものと期待をいたしているところでありますけれども、私どもは今日まで住民の皆さんが積み上げてきたこの熱意、取り組みをさらに越前市中に広げながら、そういう時期が来ればしっかりと役割を担うことができるように取り組みを進めていきたいと、このように決意をいたした次第でございます。

今日は、そういう中での大作戦でございます。是非40年前に思いをはせるとともに、これから我々が豊岡市を目標に力強く市民の皆さんと活動していくんだ、そのことを西川知事さんを初め兵庫県の関係者の皆さんにもしっかりご理解いただける、そういう大作戦になることを心から願っている次第でございます。

今後とものご参加の皆様方の私どものコウノトリに対する思い、また取り組みに力強いご支援を賜りますようお願いを申し上げ、心からの歓迎のごあいさつとさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

平成22年11月6日

ごあいさつ

福井県知事　西川一誠

皆さんこんにちは。知事の西川でございます。

今日はコウノトリの「コウちゃん」が飛来して40年、そしてこの越前市白山地区でコウノトリの里づくりの大作戦を行うという記念すべき日でございます。ご案内をいただきましたので、参加いたしました。

ただいま堀江実行委員長、また奈良市長から、いきさつを聞かせていただきましたので、その点は割愛しますけれども、いよいよ皆さんのすばらしい取り組みによって、さらに進んだタイプのコウノトリ作戦といいましょうか、お話がございましたこの8月に兵庫県の井戸知事と勝山で相談をする機会がありまして、是非とも両県力を合わせてコウノトリの里づくりのために放鳥するにはどうしたらいいかということを相談しました。これは色々なことが必要でございます。何といっても地域の皆さんの大きなお力を傾注していただく必要がございますし、今日は応援していただくメディアの皆さんもいらっしゃいます。皆さんに知っていただくことが大事でございます。環境、農業、土木等々さまざまの事業を投入して初めてできるものだと思っております。

昭和30年代から50年代にかけて福井県の県の鳥、県鳥はコウノトリでありました。今はツグミなんですね。ですので、ツグミも別に悪くはないんですが、是非またコウノトリが県の鳥になるぐらい頑張らなければならないと、こんなふうに思っています。しかし、飛来してくる鳥ということですから、これからそそうい里づくりにはいろいろ換わらないといけないと私は思いますから、途中で気持ちが変わらないよう、こなくならないように、粘り強く皆様とともにコウノトリの里づくりのために、福井県は力を合わせて、また兵庫県とも力を合わせて、みんなでこういう地域づくりを進めたいと思います。我々県といたしましても、県議会の皆さんにさまざまなこうしたお話を申し上げ、県を挙げて応援をしたいと思いますので、どうか本日お越しの皆様のこれまで以上の気持ちの一致と大きな行動といいますか、活動をお願い申し上げまして、簡単でございますが、お祝いといいますか、ごあいさつにいたしたいと思います。ありがとうございました。

平成22年11月6日

目次

コウノトリが舞う里づくり大作戦 ステージ 2 プログム ……1
里山クイズウォークラリー ……2
屋外体験･販売コーナー ……6
開会式典 ……7
基調講演 ……9
講演要旨 ……10
基調講演内容 ……11
ポスター発表 ……26
ポスター発表要旨 ……27
取組み発表 ……48
パネルディスカッション第1部 ……51
「コウノトリが舞う里作りパネルディスカッション」 ……51
パネルディスカッション内容 ……54
屋内展示物 ……80
交流懇親会 ……81
パネルディスカッション第 2 部 ……82
「環境調和型農業推進パネルディスカッション」 ……82
パネルディスカッション内容 ……83
食の文化祭 ……102
食の文化祭に集まったお料理たち……104
「コウノトリが舞う里づくり大作戦」大会宣言 ……105
チラシ ……106

コウノトリが舞う里づくり大作戦　ステージ2

プログラム

平成22年11月6日(土)

時間	プログラム内容	開催場所
10：00	里山クイズウォークラリー受付開始	公民館前広場
10：05	ゆるキャラ披露	トラックステージ
10：08	田んぼサポーターお米贈呈式	
10：11	コウノトリ名付け親証贈呈	
10：15	里山クイズウォークラリーコース説明	
10：30	里山クイズウォークラリースタート	公民館前広場
	A：歴史コース　3Km　B：里山の食コース　6Km　C：清水コース　6Km	
12：30	開会式典受付開始	中学校生徒玄関
13：00	開会式典	中学校体育館
14：00	基調講演　兵庫県豊岡市長　中貝　宗治氏	中学校体育館
15：00	ポスターセッション	中学校体育館
15：30	取組み発表	中学校体育館
16：10	コウノトリが舞う里づくりパネルディスカッション	中学校体育館
	テーマ「コウノトリの放鳥そして定着にむけて」	
17：40	コウノトリが舞う里作り大作戦宣言	
18：00	交流懇親会	いこい館2階

【サイドイベント】 12：00～16：00		公民館前広場
販売コーナー	焼きそば、おにぎり、おはぎ、味噌、たこ焼き そば、地元野菜、甘酒、コウノトリ米 すいかの粕漬け、コウノトリジャンバー	
体験コーナー	巣箱作り、わら編み、ネイチャークラフト 火起こし、身近なビオトープづくり	
展示	ポスター、バードカーヴィングコウノトリ、コウノトリ剥製	中学校体育館
記念号外発行	福井新聞「風の森号」	中学校体育館他

平成22年11月7日(日)

時間	プログラム内容	開催場所
9：00	受付	中学校生徒玄関
9：30	環境調和型農業推進パネルディスカッション	中学校多目的ホール
	テーマ「生きものを育む田んぼ」	
10：30	食の文化祭	いこい館2階
	ミニ講演　民俗研究家　結城　登美雄氏	
11：00	手作り料理の持ち寄り会	いこい館2階
12：30	講評	いこい館2階
13：00	閉会	いこい館2階

■ 開催

主催　コウノトリ「コウちゃん」飛来40周年記念事業実行委員会
共催　越前市･福井新聞社･NHK福井放送局
後援　環境省中部地方環境事務所･国土交通省福井河川国道事務所･福井県･兵庫県･豊岡市
特別協賛　三谷市民文化振興財団･げんでんふれあい福井財団･セブンイレブン記念財団

里山クイズウォークラリー

平成22年11月6日　10:00～12:00

コウノトリ呼び戻す田んぼサポーターお米贈呈式

コウノトリ「えっちゃん」名付け親表彰式

NHK徳田彰アナウンサによるオリエンテーション

ウォークラリーＡ

歴史コース ： 参加者 26 名

坂口地区 AOIIE で集合写真

馬借街道入り口にてガイドの説明を聞く参加者

ウォークラリーB

里山の食コース ： 参加者 23 名

生まれたての子豚とのふれあい体験

しらやま地区にある越前焼きの窯元を見学

ウォークラリーC

清水コース ： 参加者 35 名

清水コースは公民館前から徒歩でスタート

白山神社でのクイズ

白山神社で記念撮影

屋外体験･販売コーナー

平成 22 年 11 月 6 日　10：00～16：00

火起こし体験に参加する子どもたち

ワラ細工の体験コーナー

コウノトリ呼び戻す農法米や地元食材の販売コーナー

開会式典

平成22年11月6日　13:00～14:00

開会式典の様子

コウノトリ「唐子」の剥製用個体贈呈式で目録を受け取る奈良越前市長

越前市のコウノトリのマスコット「コウちゃん」（左）と兵庫県豊岡市のマスコットコウノトリの「コーちゃん」（中央）と玄武岩の「玄さん」（右）

基調講演

平成 22 年 11 月 6 日　14:00～15:00

基調講演を行う中貝宗治豊岡市長

基調講演

「コウノトリと共に生きる～豊岡の挑戦～」

11 月 6 日（土）14：00～15：00

講師　　兵庫県豊岡市長　中貝　宗治氏

1954年11月、兵庫県豊岡市生まれ。56歳。

1978年、京都大学法学部卒業後、兵庫県庁入庁。

1991年、兵庫県議会議員に当選し、3期10年にわたり務める。

2001年7月、豊岡市長に就任。

2005年5月、市町合併による新「豊岡市」市長就任。現在2期目。

講演要旨

2005 年 9 月 24 日、日本の自然界で一度は姿を消したコウノトリが、再び豊岡の空にはばたきました。

コウノトリは完全肉食の大型の鳥です。そのような鳥ですら野生で暮らすことができるようになったとすると、そこには膨大な量の、そしてたくさんの種類の生き物が存在するはずです。そのような豊かな自然は、コウノトリにとっても人間にとってもすばらしい自然と言えます。さらに、そのような鳥ですら暮らせるように自らの暮らしぶりを変える文化のありようもまた、人間にとってすばらしいものだと言えます。そこで、コウノトリの野生復帰をシンボルにして、コウノトリも住めるような豊かな自然環境と文化環境をもう一度創り上げようというのが、野生復帰事業の最大のねらいです。

その目的を達成するために、これまでに環境創造型農業の推進、ビオトープ水田や水田魚道の設置、河川の自然再生、湿地公園の開設、環境教育など様々な取り組みが様々な主体によって行われてきました。

例えば豊岡は今、「コウノトリ育む農法」という、農薬に頼らない稲作を進めています。この農法は飛躍的に広がっています。この農法によって、食の安全が進んだだけでなく、水田に生物多様性が戻ってきました。カエルやナマズやドジョウやフナ、コウノトリが戻ってきました。しかし、私たちが最も誇りに思うのは、子どもたちがまた田んぼに戻ってきたことです。

また、環境を良くする行動によって経済が活性化する、環境と経済が共鳴し合うような関係を「環境経済」と名づけ、「豊岡市環境経済戦略」を策定しました。環境経済戦略の柱に、環境経済型企業の集積、環境創造型農業の推進、コウノトリツーリズムの展開、地産地消の推進、エコエネルギーの利用の５本柱をすえて、現在、その具体例を積み重ねています。

コウノトリ野生復帰の取組みは、私たちが受け継いできた固有の自然・歴史・伝統・文化を守り、育て、磨きをかけて、次代へと引き継いでいく「未来への責任」を果たす挑戦です。“ 豊岡の挑戦 ” はこれからも続きます。

【基調講演内容】

演題：コウノトリとともに生きる～豊岡の挑戦～

講師：兵庫県豊岡市長　中貝宗治　氏

この場に立っとりますことの不思議さをしみじみと感じております。コウちゃん「武生」は、別に越前の皆さんと私たちを結びつけようとしたわけではありません。コウちゃん、武生は、ただひたすらに一生懸命、それぞれ我がひたすらに生き物として一生懸命生きていただけです。でも、そのおかげで越前の皆さんと豊岡の私たちのきずなができました。今日改めて来させていただいて、そのきずなをさらに深めていきたいというふうに思っております。それと、会場に来て一気に驚きました。2年前にもこちらのほうにお招きいただきまして、たしかお酒を飲んだ後、白山音頭を踊って帰った記憶がございますけれども、そのときよりもはるかに、さらに地域の盛り上がりを肌で感じることができました。

コウノトリを空に帰すことに大切なことが幾つかありますけれども、もちろん、まず自然をしっかり豊かなものにする。私たちは、つい自然界のことを考えるわけです。しかし、もう一つ忘れてはならないものがあります。自然を豊かにするのは一体誰なのか、それは紛れもない人間です。ですから、自然を豊かにしてでもコウノトリを呼び戻そうという思いを持つ人々が少ないところにコウノトリが帰ることはありません。その意味では、自然の森に戻りつつあり、かつコウノトリを呼び戻そうという文化のあるこの地こそ、コウノトリの放鳥にふさわしい、そのことを確信いたしました。今、知事にこのとおりしっかりと申し上げておきました。

それでもちょっと先輩ですので、今日は先輩面をしまして豊岡の取り組みをお話させていただきます。少しでも皆さんの参考になればと願っております。

豊岡は、兵庫県の北部、日本海に面した町です。これが市役所でありまして大通りになりますけど、これが市長室の窓であります。城崎温泉は北のほうにございます。城崎温泉に泊まってコウノトリを見るというのが、これが正しいやり方でございまして、是非また皆さんにお越しいただきたいと思います。

豊岡を空から見た写真です。これ町の中心街で、市役所はこのあたりにあります。今、私が光で指しておりますこの画面中央、河口から10キロメートル上流ですが、カレイが釣れます、アジが釣れます。円山川の河川勾配は1万分の1、10キロメートル上流に行っても高低差わずか1メートル、100メートル上流に行って高低差わずか1センチメートル、そんなことで川の底には海の水が忍び込んできています。風がないときは、こんなふうに鏡の面のように美しい水面を示し

ております。ところが、川の傾きが極端に小さいということは、水はけの悪さを意味します。

2004年10月、豊岡は台風23号によって泥の海に沈みました。こんなふうに大雨が降ると水浸しになりやすい場所を低湿地帯といいます。人間が住む上では結構厄介な場所です。ところが、その人間にとって厄介な低湿地あるいは湿地が大好きな生き物はいっぱいいます。今からその湿地が大好きな生き物の、豊岡の代表で2つごらんいただきます。この人ではありません、こっちです。コリヤナギという種類のヤナギです。円山川のはんらんがつくり出す湿地に自生をしておりました。そして、コリヤナギを使ってできたのが柳行李です。豊岡は、江戸時代、日本最大の柳行李の産地でありました。先ほどの女性は柳行李をつくる伝統工芸士の方であります。生活様式の変化に合わせて持ち手をつくるとかばんになりました。今、豊岡は革を除くと日本の生産の7割を加工する日本最大のかばんの産地です。最近はこういうな素敵なかばんもできます。円山川があるいは豊岡の自然がかばん産業を育ててきた。

もう一つ、湿地が大好きな生き物の代表例がこれです。その前に、こんな場所が湿地帯です。もう一つ湿地が大好きな生き物の代表である生き物とは、もうご存じのとおりです。かつては、里山の大きな松の上に巣をつくって、周辺の水田や川の浅瀬でえさをとっていました。カエルやナマズやドジョウやフナ、こういったものが大好きな完全肉食の鳥であります。今でこそ田んぼは機械が入りやすいように、必要なとき以外は水のない乾いた田んぼの乾田になっておりますけれども、ちょっと前までは豊岡の田んぼあるいは日本の各地で見られる田んぼってこんなんでした。どこが水路か水田かわかんない、一年中水浸しでありました。ということは、そこに一年中生き物がいるわけでありますので、コウノトリにとっては格好のえさ場でありました。ところが、明治になって鉄砲が解禁化されて、まず狩猟によって急激に数を減らします。第2次世界大戦中に松林が伐採されてねぐらを追われ、最後は戦後の環境破壊で数を減らしていって、1971年、ちょうどコウちゃんが豊岡に来られました年、日本の野生最後の1羽が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。とどめを刺したのはこれです、農薬。

この絶滅の前にコウノトリを守ろうと思うんが豊岡に来て、そして1965年、今から45年前ですけれども、飛んでいた鳥をつかまえて人口飼育が始められました。しかし、最初の25年間、来る年も来る年も一羽のひなもかえりませんでした。絶望もありました。批判もありました。コウノトリが増えてくるという確信を誰も持たないまま、いわば暗やみの中を黙々と人口飼育が続けられてきます。先ほどの松島興治郎さんです。それでもなお、努力は続けられていって、1989年、平成元年、人工飼育の開始から実に25年目の春に待望のひなが誕生いたします。そして、2年連続でひながかえって、今100羽のコウノトリが鳥かごの中、そして44羽のコウノトリが再び空を飛

んでいます。野生での絶滅から39年、人工飼育の開始から45年、豊岡でコウノトリの保護活動が明確な形をとって55年になります。長い時間と膨大なエネルギー、そしてたくさんのお金が必要でした。これからも恐らくそうだろうと思います。

では、なぜそれほどまでにして、豊岡はコウノトリを空に帰そうとするのか。ねらいは、大きく3つあります。

1つは、人間とコウノトリとの約束を守ろうということです。45年前、飛んでいた鳥を捕まえて鳥かごに閉じ込めました。安全なえさを与えていって、いつか帰してもらいます、また空に帰す。当時の人々はそう誓いました。本来なら、人間はコウノトリと約束をした、私たちは約束を果たして、もう一度コウノトリを本来の場所に返さなければなりません。

2つ目は、絶滅がなぜ生物を不幸にしたのか、世界的な貢献をしようということです。ヨーロッパにはくちばしの赤い鳥、シュバシコウと呼ばれるコウノトリいっぱいいます。特に問題はありません。しかし、くちばしの黒い、それとは別の種の本当のコウノトリは、世界中合わせても約3，000羽しかいないと言われています。絶滅寸前の鳥です。その保護に関して、世界的な貢献をしようというのが2つ目です。

そして3つ目、今度は観点を変えて、コウノトリも住める環境とはどういう環境なのかということにかかわります。コウノトリは、完全肉食の大型の鳥です。あんな鳥でもまた野生に戻すことができるようになったとすると、そこには膨大な量の、そしてたくさんの種類の生き物が存在するはずです。そのような豊かな自然は、人間にとってもすばらしい自然なんではないだろうか。もう一つあります。どんなに自然が豊かになって、えさが豊富になったとしても、飛んできた鳥をやみくもに撃ち殺す。そういう文化のところにコウノトリは暮らすことはできません。あんな鳥が近くにいたらいいねという、おおらかな文化が人間の側になければならない。そこで、コウノトリを空に返そうということをシンボルにして、合い言葉にして、コウノトリも住めるような豊かな環境、豊かな自然環境と豊かな文化環境をもう一度取り戻そうと、それが3つ目の、そして最大のねらいです。これを実現するためにさまざまな努力が積み重ねられてきました。

1999年に、兵庫県は豊岡市内に165ヘクタール、50万坪の農地を買い始めて県立コウノトリの郷公園をつくりました。そこに県立大学の研究所を置いて、鳥獣学識講座を置いて、野生化の研究と実践が進められています。その一角を市がお借りして、コウノトリ文化館をつくっています。普及啓発を担当しています。こんなふうに間近でコウノトリを見ますようなことができます。

ビオトープ水田の設置をしています。生き物が住む田んぼと言ってあります。休耕田に一年中水を張っていただいて、その管理をしていただきますと、いろんな生き物がわっとわいてきます。

豊岡の自然が豊かになります。同時に、コウノトリのえさ場にもなります。こういったビオトープ水田は市内に12ヘクタール、12万平方メートルあります。

これ干上がって死んでしまった、田んぼで死んでしまったオタマジャクシの写真です。豊岡のあたりでは6月ごろに中干しといいまして、多分こちらも同じだと思いますが、田んぼから一度水を抜きます。ところが、大量のオタマジャクシがおりまして、干からびて死んでしまいます。このオタマジャクシを救うことはできないんだろうか。こっちはアカガエルです。アカガエルは、2月から3月ごろに卵を産みます。しかし、田の水を抜くこの時期は、普通は田んぼに水がありません。アカガエルを増やすためにはどうしたらいいんだろうか。そこで、冬に水を張ってアカガエルの産卵場所を確保して、アカガエルを増やし、中干しを一月ずらすことにいたしました。農家にお願いをしました。この一月ずらすことによって、その間にオタマジャクシはカエルになります。ヤゴはトンボに変わります。その後に水がなくなっても平気です。こういった水田が市内に72ヘクタールあります。

水田魚道ですけれども、水はけをよくするために田んぼの水路はこんな落差ができてしまいました。生き物は行き来できなくなってしまいました。そこで、兵庫県の土地改良事務所の人たちがこんな水田魚道をつくってくれました。こんなに急だけど、役に立つのか。中干しのときに水田魚道を使って逃げてきたドジョウを一網打尽に捕獲します。ドジョウ以外にもさまざまな生き物がこの水田魚道を伝って川、水路、田んぼを行き来していることがわかっています。県と市で費用を折半した形で今110カ所、市内にこういった水田魚道があります。農薬に頼らないコウノトリをはぐくむ農法も広げてきました。兵庫県の農業改良普及センターの皆さん、農業者、JA、豊岡市、関係者が協力してこの農法を開発をし、そして広げてまいりました。

これは、豊岡市庁の公舎でありまして、ここにコウノトリが。民間のバス会社、飛行機にもコウノトリ。コウノトリのミュージカルができました。

余談ですけど、来年3月、JRは特急こうのとりを新しい車両で走らせることも決定がなされました。

と、まあこんな努力を重ねてきて、2005年の秋、コウノトリ未来国際会議が開かれて、そして翌日の午後人々が続々とコウノトリの郷公園にやってまいりました。当日です。そして、歴史的瞬間がやってまいります。このとき、野生での絶滅から34年間経過をしておりました。コウちゃん、武生は、これは9月の放鳥ですけども、この年の6月に息を引き取っておりました。最初の1羽が飛んだときにやったあと大きな声を出しました。それ、私の声でありました。そして、その2年後、2007年9月20日、日本の野外で43年ぶりにヒナがかえって、46年ぶりに巣立っていきました。

さらに、さまざまな努力が続いています。円山川にひのそ島という中の島がありました。水はけを阻害して治水上問題だということで、全島掘削の計画が上がりました。しかし、自然も大切だ。そこで、歩み寄りがなされまして、半分だけ掘削がなされました。半分はあくまで掘削し、残り半分は水ひたひたのところまで削り取られました。こんな感じです。そしたら、ちゃんとコウノトリがやってきて、えさ場として利用するようになりました。現在、国土交通省と兵庫県は、円山川水系の湿地再生をしています。河川敷を湿地にする。こういった湿地が既に128ヘクタールつくっております。

これは、戸島というとこの田んぼです。大変な現場でした。田植えをするために足を入れると、ずぶずぶずぶっとひざまで突っ込んでしまう。機械を入れることはできない。大変な労働でした。なぜか、夫殺しと言わずに嫁殺しの田んぼというふうに言われていました。こんな田んぼ嫌だということで、土地改良の工事が始まりました。その順番を待っている間、休耕していたところ、2005年の夏、ミズアオイ、絶滅危惧種の植物が一斉に花を咲かせました。そして、同じくその2005年の夏、大陸からやってきた1羽の野生のコウノトリが毎日のようにやってくるようになりました。

サギのえさを横取りしようとして失敗した写真です。放置しときますと、工事が進んでこの美しい光景は未来永劫失われてしまいます。守ってほしいという声は、市民から上がりました。そこで、市が4ヘクタール確保して、県と共同で工事をしまして、ハチゴロウの戸島湿地という湿地公園にいたしました。先ほどの野生のコウノトリは、8月5日に来たところからハチゴウという名前で親しまれていました。ハチゴロウがこの場所の大切さを教えてくれた。その感謝の気持ちを未来永劫に伝えようということで、条例上正式にこの公園の名前をハチゴウの戸島湿地といたしました。ハチゴロウは4年間ほど飛びましたけれども、大変残念ながら死んでしまいました。

城崎温泉、日本海、円山川、この場所です。日本海、円山川、城崎温泉、ここが今日と一緒の写真ですが、今、私たちはこの線で囲ってるあたりをラムサール条約に登記申請しようと運動をしています。

1960年、50年前、豊岡市内で撮られた写真です。朝子供たちが田んぼ道を学校へ行こうとしています。2羽のコウノトリがここにいて、あたかも行ってらっしゃあいと言わんばかりに子供たちを見送っています。1960年、50年前の写真です。

2006年の写真です。50年近くたって、またあの光景が戻ってきました。こんな感じです。ようく見ています。

そして、今豊岡が開きつつある新たな取り組みはこうです。環境経済政策です。環境と経済は、しばしば矛盾するというふうに信じられてきました。公害が決定的にそうです。経済は、環境を徹

底的に痛めつけながら経済は発展するという関係があります。しかし、そうではなくって、環境をよくすればするほど経済が活性化をする。そして、そのことが要因となって環境をよくするほど、環境行動がさらに広がる。環境と経済が共鳴する関係を環境経済と名づけまして、今私たちはそれを広げる努力を重ねています。ねらいが3つあります。

1つは持続可能性です。環境行動自体の持続可能性です。環境をよくする行動の意義は、頭ではわかります。でも、なかなか長続きしません。アル･ゴアさんの「不都合な真実」という映画を見て、こんなに大切なものなのか、よっしゃ、帰ったら早速電気を消すぞ、三日続きません。これが環境行動の厳しい現実です。しかし、環境維持の行動は長く続かなければ、そして仲間が増えていかなければ、結果を出すことはできません。そのためには、経済によって裏づけされることが最も有効である、そのことを言っています。

2つ目は自立です。豊岡市も越前市も、自立を強く求められています。私たちの暮らしの財政も経済が支えています。経済を元気にしなければなりません。では、日本の地方で、片田舎でどういう分野が活性化の可能性が残されているのか。それは、環境の分野だと私は思います。

3つ目は誇りです。もし豊岡や越前が自然破壊、環境破壊によってどうなる。環境をよくする。まさにそのことによって経済を元気にしていく。そういう町になることができれば、私たちはみずからを大いに誇ることができるはずです。誇りは、まちづくりのエネルギーになります。

こんなイメージです。環境への取り組みをすると経済効果が出る。それならもっと守ろうということで、環境への取り組みが広がる。そうすると、また経済が元気になる。そうすると、もっと頑張ろうとまた環境への取り組みが広がる。こういった一例です。

具体例です。豊岡に太陽電池をつくるカネカソーラーテックという会社があります。世界中の人々が地球温暖化対策に貢献しようとして、つまり環境にいい行動をとればとるほどＣＯ2が減ります。そして、この会社はもうかります。環境と経済が共鳴するという一つの例です。

これは豊岡の建設会社なんですが、くい打ちの専門の会社です。廃タイヤ対策を考えました。地面に穴を掘りまして、廃タイヤをここにドーナツ状に重ねて壁をつくります。これ地面の中にタイヤの壁ができるています。こちら側は重機で高く積みまして、振動がこの地上に来たときにどうなるかを計測している写真です。何もないとこです。震動源から遠ざかれば遠ざかるほど、振動が確かに弱まってきます。でも、それほどではありません。ところが、この工法をとりますと、振動は見事に減っていきます。大阪府で採用されました。モノレールがあって、住宅街があって、振動に苦しんでおりました。なかなかいい振動対策がなかった。そこで、この工法を施したところ振動は半分になりました。廃タイヤ対策という環境行動が振動対策という環境行動になり、そしてこ

の企業の営業になっています。環境と経済は共鳴をするということです。

炭焼きの会社もあります。この炭焼きというのは大変な労働でした。焼けますと炭出しといって焼けた炭を出します。半日仕事で、しかも物すごく熱い。この会社は技術開発をいたしました。トロッコの中に火を入れて、そのまま燃やします。ここに線路があります。焼けますとトロッコごと線路の上を通って出てきます。上から蓋がおりてきまして空気を遮断すると、火はひゅっと消えます。窯の中は熱いものです。そこに生木を入れると、あっという間に乾いて、そして炭木になります。この工法といいますか、そこの技術開発の前のこの会社の社屋ですけれども、今や大発展を遂げました。炭焼きが広がれば広がるほど、里山の整備が進みます。環境と経済が共鳴をする。この企業も炭でもうかるからであります。

こんなこともやっています。これは製材くずを固めてペレットにするという技術。今、豊岡市は、小･中学校の石油ストーブを順次ペレットストーブに置きかえていっています。ボイラーにペレットボイラーを設置していっています。そして、森林組合が来年度からペレットの生産を開始します。これは、経済的に成り立つ最低限の需要は、豊岡市役所が引き受ける。具体的には小･中学校や、あるいは温泉で使う。そうしますと間伐が進みます。今切り捨て間伐で間伐材だけが放置されておりますけれども、とってもそんなもの出してくるとお金がかかってしまう。でも、このペレットがもうかれば、森林の整備が進みます。市役所は、石油とペレットとの差額で燃料費がもうかります。環境と経済の共鳴の例です。

農業も、もちろん決定的に重要です。コウノトリに最後のとどめを刺したのは農薬でした。しかし、だからといって農薬はけしからんというだけでは、実は事態は何も変わりません。なぜか。日本はモンスーンアジアでありますから。水量が上がりますように、暑い夏に大量の雨が降ります。お日様の光と水に恵まれることが光合成の条件です。草はあっという間に生えてきます。日本の農業は草との闘いでもありました。しかも、これ大変な重労働でありました。虫もわいてきます。農薬は、あっという間に草を倒します。虫を殺します。農家から重い労働が消えました。したがって、農家が農薬に飛びついたのは、極めて合理的な対応でありました。そこで、農薬をやめろと言うのであれば、私たちは2つのことをしなければなりません。1つは、農薬に頼らなくても比較的簡単にお米ができる、野菜ができるという技術体系をちゃんと確立をすること。もう一つは、とはいっても手間暇かかる農業の産物を、マーケットがちゃんと高く評価をする、買ってくれる。この仕組みをつくるということであります。

米については、コウノトリをはぐくむ農法というものが、関係者の取り組みでできました。これは虫対策ですが、農薬を使わないのでウンカがつきます。もちろん害虫です。しかし、クモが発生

してウンカを食べます。クモをカエルが食べます。カエルは蛇が食べます。カエルや蛇をコウノトリが食べます。自然界の食べたり食べられたりする関係で、農薬を置きかえていく、例えばそういう農法です。

カメムシをカエルが食べております。農薬を使わずにカエルがたくさんいる田んぼには、カメムシの害が出ないというふうに言われています。

このはぐくむ農法による水稲作付面積の推移です。豊岡市内だけのものです。減農薬と無農薬の対比になっていますけれども、猛烈な勢いで減ってきています。しかも、このコウノトリをはぐくむ農法のお米は、減農薬タイプで通常のものの約6割から7割高い、無農薬堆肥のものの10割は高く店頭で売られています。例えばイトーヨーカ堂、日本最大の量販店でありますけれども、全国130の店舗でこのコウノトリのお米を売っているといわれます。兵庫県内に店舗展開するトーホーストアでも売っています。このコウノトリをはぐくむお米の取扱店は、全国でデパートなんかも含めまして326店舗になっています。さらに最近JAたじまのこの取り組みが第12回グリーン購入大賞の環境大臣賞、最高賞を受賞しています。

お酒もたくさんできました。これなど6合びん 5000 円です。一升びん1万円のコウノトリのお酒です。これ焼酎です。中身よりもこの器のほうが高いと言われておりましたけれども。大豆もできました、コウノトリ大豆です。着実にこれも作付面積は広がっています。これは、関西の商社が白大豆、通常の大豆の3倍の値段で引き取ってくれます。大豆を使って何かこうじでありますとかしょうゆあるいは豆腐といったものができています。

環境にいい農業をすると、ちゃんと報われると、環境と経済は共鳴なのです。お客様も随分出てまいりました。この年の秋にも放鳥園はされました。最近もとりわけ豊かではなくて少し減っていますけれども、それでも40万人前後の方々が豊岡にやってこられます。コウノトリを見るためにやってこられます。

この人たちを手ぶらで帰していいのかという深刻な議論がありまして、コウノトリの郷公園の近くに土産物屋をつくりました。このためにコウノトリのお米とかコウノトリグッズがええです。

中国から大学生が環境学識旅行でやってきています。ヨーロッパから研究者もやってきました。韓国でもコウノトリ保護鳥計画がありまして、関係者が続々と豊岡にやってきています。こういったコウノトリによる観光客増大による経済波及効果が調査をされました。慶應大学の大沼教授らによりまして、毎年毎年10億円という結果が出ています。つまり、豊岡は本当にいい農業をやったり、そしてよりたくさんのコウノトリを空に返せば返すほど、多くの人々が豊岡にやってきて、そして商工業が栄える。環境と経済が共鳴するという例であります。

最近、これも国連でこの取り組みが評価をされました。ＴＥＥＢと訳されておりますけれども、生態系の性質が及ぼす経済界という報告書が先日のＣＯＰ１０の最中に、国連環境計画によって発表されました。これはもう生物多様性が失われたときに、どのくらいの経済的損失があるのか、あるいは守るとどのくらい経済的に得なのか。その経済額でありますけれども、世界の成功例を幾つか示されておりまして、その中に豊岡の取り組みが、日本あるいは世界の代表例として紹介をされました。

これまでの豊岡のコウノトリをめぐるさまざまな取り組みによって、豊岡の田んぼの中にいろんな生き物が帰ってきました。カエルやナマズやドジョウやフナも帰ってきました。コハクチョウもやってくるようになりました。コウノトリも帰ってきました。コウノトリが舞いおりるような田んぼの中に虫がいっぱいいますので、ツバメがいっぱい飛んでいます。

しかし、豊岡の水田風景に戻ってきたものの中で、私たちが最も誇りに思うものは子供です、子供たち。子供たちがまた田んぼの中に帰ってきました。そして、新田小学校というんですが、コウノトリを最初に放鳥された小学校、子供たちが立ち上がりました。子供たちは、自分たちの地域でコウノトリの放鳥がなされ、そしてコウノトリをはぐくむ農法が広がっていることを知りました。お百姓さんたちに豊岡農法のことを学んでいます。

このコウノトリをはぐくむ農法が広がれば広がるほど豊岡の環境はよくなって、コウノトリにとってもすばらしいし、人間にとってもすばらしい。それにはどうしたら、このコウノトリをはぐくむ農法を広げることができるようになるのか。子供たちは、全く同じようにそれを見つけました。消費を増やせばいい。では、どうしたらこのお米の消費を増やすことができるのかな。ふと見ると学校のそばにコンビニがありました。そこで子供たちは、自分たちの主張を紙に書いて、コンビニの店長さんに会いに行きました。店長さん、あの中で売っているおにぎり、コウノトリのお米でつくってくれませんか、そうすれば消費が増えて、はぐくむ農法が広がります。環境がよくなる。残念ながら高いお米でありまして、しかもこういうものはお店の仕組みですから、残念ながら実現をしませんでした。しかし、子供たちは、そんなことに負けたりはしません。次は何か、そうだ学校給食だ。学校給食ではぐくむお米を使ってもらったら消費が増えると思い、誰に言ったらいいのか、市長のもとに参りまして、子供たちは自分たちだけで私のアポをとって、自分たちだけでやってきました。本当に驚きました。この子供たちの行動力と、そして論理の確かさ、私は子供たちに約束をしました。

そして、昨年4月から週5回米飯にいたしました。それまで、豊岡市は週5日の学校給食のうち4日は自元産の慣行農法のコシヒカリ、4日間、1日だけパンをしておりました。昨年4月からは

パン食をやめまして、5日にうち1日だけですけれども、コウノトリのお米を使うことにしました。あとの4日は普通のお米です。このことによりまして、子供たちが消費するお米、週1回でありますけれども、茶碗34万杯、作付面積にして7ヘクタール、コウノトリをはぐくむ農法の水田が広がったことになります。子供たちの行動が自治体を動かしました。

そして、子供たちは、自分たちでも無農薬タイプのお米づくりやりたいというふうに思いました。やっぱり水田魚道もつくらなあかん。これ通常やりますと60万円から70万円かかります。子供たちには手が出ません。子供たちは考えました。森林組合のおっちゃんに言いに行きました。森林組合の人たちも驚いて、いいよ、ただでやる、それならということで、材料をただでもらいました。そして、地域の人たちの力もかりて、見事に水田魚道ができ上がりました。今年の春、ちゃんとこの水田魚道を伝ってマナズが子供たちの田んぼに入ってきました。ナマズは田んぼで卵を産みます。田んぼの水は温かくて気持ちがよい、流れがないので安心です。そして、稚魚になって少し大きくなると、今度は田んぼから水路を伝って川へ入ってきます。こういった循環が取り戻されました。そして、自分たちが肥料をつくり、苗床をつくり、田植えをしてお米ができました。

通常ですと、ここでおにぎりをして、みんなで食べたら終わりなんですが、今やこの子たちは環境経済戦略を学んでいます。つくったお米は売らなければならない。まず、近くの村の中にある朝市で売れません、高いから。やっぱり町なかだ、豊岡の町の真ん中に青空市場というところがあります。これは場所代を払って自分のつくった野菜とか、時には魚などを売る場所なんですが、そこに目をつけました。管理人の人は、いいよ、君たちにはただで貸してやるよと言って、その日は借りました。子供たちは、さらにしたたかでありまして、ちゃんと記者発表をしておりました。朝、近所のおばさんたちが買い物かごを下げて市場に来ますと、テレビカメラがずらっと並んでいて、新聞記者がカメラをばあっと構えていて、どうしたの、どうしたのというふうに話が一遍に広まって、お米は完売をいたしました。

この子供たちが1年目の活動を冊子にまとめました。そのタイトルです。つながりの中に私たちが居る。見事な洞察力だと思います。自分の命が他の命とつながっている、さまざまな生き物とつながっている、あるいは人々とつながっている、そのことを完結に表現したのでありますけれども、農業というのは、子供たちを育てるんだなと改めてそういうふうに思います。

そして、先ほどコンビニはなくなると申し上げましたけれども、子供たちの夢は別の形で実現をいたしました。トーホーストアといいまして兵庫県内で39店舗展開しているスーパーのチェーン店ですけれども、7月1日からコウノトリのお米を使ったおにぎりの販売を開始をいたしました。よ

く売れてるというふうに聞いております。先日、子供たちに、こんなことが始まったよと言ったら、大喜びをしておりました。コウノトリやコウノトリをはぐくむ農法が変えたのは、子供たちだけではありません。農業者も変えました。この男性は、コウノトリをはぐくむ農法の中心的な人物でありますけれども、何と87歳で、150万円の小型トラクターを買われました。そして、89歳で600万円のコンバインを買われました。経済的な　から考えますと、まともなこととは思いません。しかしながら、この方は来年もっと頑張る、コウノトリをはぐくむ農法に取り組んでいるんだという希望に燃えて、この大変な投資をされています。つまり、コウノトリをはぐくむ農法は、農家に誇りと自分の農業に対する希望をもたらしたんだと私は思っています。

さらに、地域社会も変わりつつあります。これは豊岡の海辺の町、田結という町、田結というとこですが。これ何やってるかといいますと、先祖伝来の土地を受けておりまして、水路をつくっています。休耕田を湿地にかえてしまいました。ここにも連日のようにコウノトリがやってきています。そして、この地域の人々は、そのことを喜び、村中挙げて湿地おこしをしています。地域の団結も深まってまいりました。コウノトリは、子供たちの意識を変え、そして農業者の意識を変え、希望を与え、そして村の団結を強めています。

これは、放鳥したコウノトリはどんなところに行ったかというその軌跡です。豊岡から結構遠くまで行っています。一年ここですね。このときはちょっと惜しかったかもしれません。

こちらは、野外で生まれた幼鳥の飛んで行った軌跡です。こんなとこまで、湿地のとこまで来てます。もちろん、ちゃんと越前にも来ております。

具体例をお示しいたします。1年目ですが、豊岡を飛んで愛媛県西予市に行きました。そして、越前町に来て、見事に越前市にやってまいりました。今ちょっと豊岡のほうに出張しておりますけれども、また帰ってくるに違いないと思います。こんないろんな動きをしております。

私も区別がつかないんですが、こちらがえっちゃんだそうであります。くちばしの折れたコウノトリ、もう皆さんご存じの物語がありました。40周年、本当におめでとうございます。コウノトリを呼び戻すためのこういう努力が地域で行っています。そして、まさにこの田んぼに、こういった田んぼの中にえっちゃんが飛んでいったんですね。よく頑張りましたというふうに、コウノトリが表彰状を皆さんのもとに届けてくれたというふうに思っております。

ちゃっかりと、こういうブランドができておりまして、高く売れているというふうにお聞きをいたしました。是非この地でもこういったとこがさらに広がって、環境と経済が共鳴するという例をさらにさらに広げていただければなあと、そのことを強く思っております。

2例目です。今治に飛んでおりまして、上郡に帰ってきたんですが、豊岡に帰ってきて、再び

西予市に行って、加賀市に行って、新潟に行ってトキを励ましまして、大崎市に行きました、宮城県の大崎市。この大崎市は蕪栗沼というのがありまして、ここにマガモが毎年冬になると何十万羽もやってくる、そういったところであります。そして、そこには実はふゆみず田んぼというものが広がっています。冬に水を張る農法です。私たちは、この大崎市からふゆみず田んぼを見習いました。コウノトリが感謝状を大崎に持っていったんだと、そういうふうに思っています。

佐渡です。ここは、トキの放鳥がなされています。そして、「朱鷺と暮らす郷」米というお米がつくられています。こういうふうに、従来の無農薬、減農薬、あるいは環境創造型農業、有機農業といいますのは、ほとんどこれを売りにしてました。食べてあなたにとって安全･安心ですよ、あなたも、それ食べてる人にとって安心･安全ですよ、しかもおいしいですよ、それプラス、実はその田んぼがいろんな生き物をはぐくんでいます。これはもともとあったことですけれども、しかし売り方としては、ここはうたわれておりませんでした。最近になって安全･安心、おいしいということに加えて、その田んぼがいろんな生き物をはぐくんでいるよということを明確に目的として打ち出した農法がここに一つあります。

今年の4月の段階の調査で全国で37例あるんだそうです。もちろん呼び戻す農法もその一つであります。これは、またなかなか消費者のハートをとらえるところまではいっていないのが現状です。これは新しいフロンティアです。多くの人々が安全･安心プラス、ああ、生き物を養ってるんだなあということに着目をして、少し高くても買っていただける。そういうふうになれば、日本は大きく変わってくるだろうと、私は思います。

1960年、豊岡市内出石川で撮られた写真です。農家の女性と7頭の但馬牛、12頭のコウノトリ、この距離で暮らしていました。十数年前に、私たちはこの写真を使って大きなポスターをつくりました。そのポスターに「35年前みんなで暮らしていた」という言葉を添えました。同時に「私たちは人間の努力を信じます」という言葉を添えました。このポスターをつくったときに、あのおばあちゃん、あそこだから、あそこのおばあちゃんの写真だということになって、この女性のところにインタビューに行きました。新聞記者と市の職員が行きました。ところが、この女性は当時ですから37年も昔の写真で、しかも後ろ姿、自分かどうかわかりません。でも、多分私でしょう。なぜなら、この牛はうちの牛だと。一つの家の中に仲よく暮らしていた時代がありました。そして、この女性はコウノトリのことはほとんど話をされず、ひたすら牛の話をされて、最後にこう言われたんだそうです。「あのころは、心が本当に豊かでした」。私たちが何を失ってきたか、何を取り戻そうとしているのか、この写真が象徴的に示しているように思います。そして、そのうちこの写真は、最初に冒頭に1枚だけごらんいただいた、あの恐ろしい水害の写真と重ね合わせて考えるときに、

私たちはどのように自然と共生できるのか、その問いを私たちに突きつけているように思います。豊岡は、豊岡の答えを求めてまいります。越前の皆さんは、皆さん自身の答えを求めていっていただきたいと思います。ちなみに、数カ月前、99歳でこの女性はお亡くなりになりました。

2007年、同じ場所です。ここまで戻ってきました。しかし、まだここまでしか戻っていません。

2008年10月、ちょうど国土交通省が河川敷を浅く掘って湿地にした場所に15羽のコウノトリがおりてきました。実は、野生で絶命した動物を、それ以前に人間が動物園で増やしていって、もう一度野に返した例は世界で幾つか成功例はあります。しかし、人里に返す例は世界でうちだけであります。

これは昨年10月、円山川です。18羽のコウノトリがおりてきました。何をしたかというと、大量の落ちアユがおりました。それを求めてコウノトリとカラスとトンビとカマガワとサギと人間がえさをとり合っておりました。

これは「Satoyama」という冊子です。生物多様性条約の事務局、カナダにありますけれども、事務局の機関誌「Satoyama」といいます。今年のニューヨークで開かれました国連総会と先日の名古屋のCOP10でもこの冊子が配られました。事務局長の求めによりまして、こういった取り組みを紹介しておるものです。

そして、先月、10月30、31日と秋篠宮殿下、妃殿下をお招きして、第4回のコウノトリの国際会議を豊岡でやりました。どっかで見たことあるんですが、ちゃんとお話をさせていただきまして、越前市の取り組みを高らかに皆さんに紹介をしてございました。

これは、今月の市長会議に書いてありまして、コウノトリが飛んでいったご縁で結ばれていった自治体のトップや関係者が集まって、健康に関する会議でもちゃんとこの一年の取り組みを、ちゃんと仕事をしているわけですから、お話しさせていただきました。

この方もどっかで見た方なんですけれども、こんなふうに越前市の取り組みが全国に知られるようになってまいりました。これからもお互いに励まし合いながら、頑張っていけたらなと思っています。

実は、豊岡は植村直己さん、世界的大冒険家のふるさとでもあります。日本人で初めてエベレストに登頂し、アマゾン5，000キロをたった一人で海岸から歩き、あるいはたった一人で犬ぞりで北極圏の走破をなし遂げた方です。この方を記念して豊岡は植村直己冒険賞というものを設けています。毎年毎年日本人の冒険家ですぐれた冒険をし、かつ謙虚な方にこの賞を差し上げています。過去においては、永瀬忠志さん、どう考えても、こんなリアカーを引いてひたすら歩き続けて30年、地球一周回りました、サハラ砂漠を泣きながら上った、アマゾンのジャングル

も歩いた、こんな方々がおられます。

小松由佳さん、日本人最年少の女性で、K2、世界で2番目に高く、世界で最も恐ろしい山に登頂された方であります。非常にフリーな方でありまして、上っていくと突然何の前ぶれもなく冷蔵庫大の岩が死ねって言わんばかりに落ちてくるんだそうであります。逃げるとこはどこにもない。ひたすら当たらないでくれと祈るしかない。そこの登頂に成功された日本人女性初のK2登頂に成功された方です。

有名なところでは野口健さん、こんな方も受賞されておられます。

この歴代の受賞者に共通することがあります。それは冒険をする上で最も大切なことは何か。一歩ずつ一歩ずつ、目指すべき山頂ははるかかなたにある、目指すべき目的地ははるかかなたにある。上って上っても山頂は近づいてこない。歩いても歩いても出口は近づいてこない。それどころか遠ざかっていくような気すらする。そんなときに、人は大抵は大声でわめきながら走ります。いや、それは極めてまずいやり方である。どんなに目的地がはるかかなたにあったとしても、やるべきことは目の前のこと、目の前のことを確実に、着実に進めることである。これは、豊岡の取り組みにとっても、あるいは越前の皆さんのコウノトリを呼び戻すということにとっても同じことが言えると思います。どんなに目指すべき目的地がはるかかなたにあろうとも、やるべきことは目の前の一歩を確実に、着実に。同時に、この冒険家たちはもう一つ大切なことを言っているんだと私は思います。つまり、目的達成のための今、目的のための手段のみではなくって、同時に今まさにこのとき、二度と返ってこないこの瞬間こそがいとおしい、大切だと、恐らく冒険家たちは一歩一歩を、ごとにいとおしむように歩いてきたに違いない。そう思います。皆さんも目的を目指しながらも、今の目の前の一歩を楽しみながら、いとおしみながら進んでいただければ必ず目的につくことができる、そう信じます。

日本の野外で43年後に生まれ、46年後に巣立っていったコウノトリの誕生から巣立ちまで約3分間の映像をごらんください。

(映像)

○ 中貝宗治氏(豊岡市長)

懸命に生きようとする父と懸命に守ろうとする父、人間とコウノトリと姿形は違いますけれども、あのコウノトリの親子の姿は、私たち人間の家族の姿でもあります。結局、私たちをコウノトリの野生化に向けて突き動かせてきたもの、それはこれだと思います。命への共感、豊岡や越前のため、日本のいろんなところで命への共感に満ちた町ができれば、恐らく日本は大きく変わっていくんだろうというふうに思います。

40年前にコウちゃん、武生から豊岡に送られるときに、当時保護活動を一生懸命やってくれた白山小学校の子供たち全員がコウちゃんのくちばしをさわったり、あるいは肩をなでなでして別れを惜しんだというふうに聞きました。いつかお返しをしなければいけないと私も思っておりました。豊岡は、越前の皆さんの味方です。皆さんの応援を続けてまいります。そして、この長い長いコウノトリをめぐる越前の物語、あるいは豊岡の物語を比べるときに、そしてその中から浮かんでくる言葉を最後に皆さんにプレゼントいたします。願うこと、願い続けることを投げ出さないことと、お互いこれから頑張っていきましょう。どうもありがとうございました。

ポスター発表

平成 22 年 11 月 6 日　15：00～15：30

発表者　32 団体

小中学校と大学生によるポスター発表の様子

各種環境保全団体による展示やポスター発表

【ポスター発表要旨集】

ポスターセッション参加団体 (11 月 5 日現在)

ポスターNo.	発表団体名
1	越前市白山小学校
2	越前市坂口小学校
3	越前市武生第五中学校
4	和歌山大学大学院システム工学研究科環境社会情報クラスタ
5	福井大学教育地域科学部
6	福井工業大学工学部環境生命科学化
7	福井県ホタルの会
8	河和田自然に親しむ会
9	水辺と生き物を守る農家と市民の会
10	コウノトリみまもり隊
11	武生メダカ連絡会
12	日本ビオトープ管理士会福井県支部
13	ホタルの里ようろ
14	コウノトリ呼び戻す農法部会
15	福井新聞社
16	北日野地区自治振興会
17	王子保小学校 PTA
18	NPO 法人 土と命の会
19	えちぜん環境楽
20	坂口エコメイト
21	坂口地区うららの町づくり振興会環境部会
22	越前市エコビレッジ交流センター
23	坂口菜の花グループ
24	国土交通省
25	JA たんなん･今立有機農業研究会

26	越前市子ども会育成連絡協議会町内子ども壁新聞
27	安養寺町のまちづくり「サギ草王国」
28	市民参加の森づくり「郷の森里楽」
29	坂口地区うららの町づくり振興会里山部会
30	福井県両生類は虫類研究会
31	たけのっ子劇場
32	コウちゃんを愛する会
33	環境ふくい推進協議会
34	ハスプロジェクト推進協議会

※ 要旨は、事前に提出のあった団体のみ掲載

No.1 越前市白山小学校活動紹介

白山小学校では5・6年生が総合的な学習の時間に行っている里地里山学習の中で、コウノトリが白山地区に戻ってくるための活動をしています。その活動の内容は学校の田んぼを冬でも水を張っておく「冬水田んぼ」にしていることと、無農薬で稲を育てていることです。冬水田んぼにすることで、コウノトリのえさとなる水生生物がたくさん住むことができます。また、冬水田んぼでは無農薬でお米を作ることで、普通の田んぼよりもたくさんの生き物が住んでいます。その中には、コウノトリが大好物なドジョウも住んでいます。

また、冬水田んぼで稲を育てながら定期的に生き物調査と稲の生育調査をしています。生き物調査では、班ごとに生き物を捕まえ、その生き物をトレイに分け、どんな生き物がいたかや数を記録しています。稲の生育調べでは、稲の高さ、くきの本数、水位などを記録し、生長の様子を調べています。無農薬で稲を育てているので、田んぼにはオモダカ、コナギ、セリなどの草が生えやすく、定期的に除草をすることも欠かせま

せん。

さらに、白山地区には卒業生や地元の人が整備したビオトープがあり、そこでも生き物調査をしています。ビオトープには、冬水田んぼにはいない生き物や絶滅危惧種に指定されている貴重な生き物がたくさんいます。絶滅危惧種に触れられる貴重な体験ができるので児童は張り切って調査をしています。

これらの活動を通して、児童は自然豊かな白山にさらに興味を持ち、自然の大切さを実感し、生き物や白山を愛する心を育んでいます。また、地域の方との交流も深め、地域の取り組みについても学んでいます。コウノトリが舞い戻ってくるには、学校だけでなく、地域と協力して活動していくことが大切です。地域を挙げて取り組んでいる「コウノトリが舞う里つくり」のために、今後も里地里山学習を続けていきたいと思います。

No.2　越前市坂口小学校

「田んぼと生き物と人」

1　はじめに

坂口地区は越前市の南西部に位置し，矢良巣岳をはじめとする山々に囲まれ，吉野瀬川の清流が流れ，豊かな田んぼが広がっている自然豊かなところである。アベサンショウウオやハッチョウトンボなど希少野生生物が多く生息している。その保護のために，地区全体で，ビオトープ作りや観察会の実施等の取り組みを行っている。

現在，学校ではエコビレッジ交流センターの指導員や自治振興会環境部員の協力のもと，「ふゆみずたんぼ」の米作りや生き物観察等の体験活動に取り組み，調査・観察・啓発活動などを行っている。また，本校児童や二中坂口分校の生徒は，全員エコ

メイトに属していて，学校内外で保護活動にあたっている。

2　取り組み

(1) 「ふゆみずたんぼ」での稲作体験やしめ縄・餅つき・かき餅作り体験

(2) 田んぼでの生き物調査・まとめ・発表会

（5・6年の総合的な学習・エコメイト活動　～年間を通して～）

現在，5・6年生は先輩たちの生き物調査も含めて，H19 年～H21 年までで見つけた生き物をリストアップし，そのまとめに重点を置いた活動に取り組んでいる。

3　成果

生き物いっぱいの水田で，田植えや草取り稲刈りは大変である。が，子どもたちが仕事をしながら生き物を見つけた時の歓声やおいしいお餅を食べている時の満足そうな顔は，とても優しく輝いていて素敵である。田んぼではたくさんの命が育まれる。弱肉強食の世界や食物連鎖のしくみも学べる。また，生き物と人，人と人をつなぎ，命の尊さを教えてくれる大切な場所となっている。

No.3　越前市武生第五中学校

本校では、ふるさとの自然環境の素晴らしさを知り、守って行くために、総合的な学習の時間を利用して調査活動を行っている。テーマは「アベサンショウウオの里に再び

舞え！コウノトリ」。今年度は、「白山地区で、コウノトリの餌は確保できるのか？」という調査テーマのもと、小学校田の生き物調査と、白山地区における「コウノトリを育むお米」作りに取り組む冬水田んぼの調査を行った。その結果と考察について発表する。また、中学生が作成した白山地区の冬みず田んぼマップを紹介する。

ポスターの概要

白山地区でコウノトリの餌は確保できるのか？

上記のテーマを検証するため、小学校田で畦にすむカエルと田んぼの中に住む生き物について調査し、その結果を基に地区内の冬みず田んぼに生息する生き物の数を予測したところ、6月中旬において、白山地区では、コウノトリ1羽が2ヶ月生息するくらいの餌となる生き物が生息していることが分かった。

白山地区のコウノトリをはぐくむ冬みず田んぼマップ

白山地区におけるコウノトリを育む米をつくる冬みず田んぼ、そして今年春にコウノトリが飛来した田んぼ周辺の調査を行った。畦を歩き、冬みず田んぼに生きる生き物や、畦や田んぼのようす、慣行農田との違いを調べ、まとめた。

No.4　和歌山大学大学院　システム工学研究科環境社会情報クラスタ

福井県越前市白山･坂口地区における地域再生の仕組みに関する研究

和歌山大学大学院　システム工学研究科
環境社会情報クラスタ　上田貴昭

里地里山などの集落では，1980 年代以降の急速な経済成長と国際化に伴い，地域産業は衰退し，都市へ人口が流出，高齢化，後継者不足といった問題を抱えるようになった。福井県越前市白山･坂口地区では地元住民による環境保全活動が地域再生の核となっている。このような仕組みは他の地域ではあまり見られない。本研究では，この地域における自然再生の仕組みを明確にすることを目的とした。

白山･坂口地区は人口約 2500 人，世帯数約 650 世帯，高齢化率約 32%で，サギソウやアベサンショウウオをはじめに福井県レッドデータブックに記載されている 106 希少野生生物が生息しており，生態学的にも非常に貴重な地域である。

調査は地域の振興会や様々な自然保全活動団体，環境創造型農法実施団体の方々へのインタビューをはじめに，資料収集，現地調査などを行った。

白山･坂口地区には昭和 45 年に特別天然記念物であるコウノトリが飛来した。そのコウノトリは嘴が折れており，地元住民や小学校児童らがエサを与えるなど世話をし「コウちゃん」と名付けた。翌年，衰弱した「コウちゃん」は兵庫県豊岡市の人工飼育場へと移送された。この出来事は地域住民の心に「もう一度，地域にコウノトリを呼び戻したい」という想いを残した。コウノトリが生息するためには豊かな自然環境が必要であるため，自然保全･再生，環境共生型農法に取り組み，地域の豊かな自然環境が創

造･維持している。これの環境を活用してエコキャンプや農家民泊，ワークステイなどによる地域外交流，小中学生を対象に農業体験や環境学習を行っている。また，環境共生型農法によって作られた農産物は地域の新しい産業となる。このような活動により地域への定住，Iターン･Uターンの促進，後継者の育成などの地域再生へと繋がっていく。

No.5　福井大学教育地域科学部

コウノトリを呼び戻す田んぼサポーター活動記録 in 2010

福井大学教育地域科学部保科研究室

コウノトリを呼ぶ田んぼのサポーターとしての活動報告．発表者自身の企画ではなく，多数の参加者を代表しての発表となる．

稲刈りとはさ掛け（9月）

手作業での草取り（6 月）

雨の中の田植え（5 月）

No.6　　福井工業大学環境生命化学科　石黒研究室

越前市丸岡町の溜池の魚類相

水野剛志*1、日和佳政*2、有里美彦*3、石黒直哉*3

福井工業大学環境生命化学科石黒研究室は、遺伝子の側面から水圏生物の自然史の解明を試みています。遺伝子を調べることによって、その生物が辿ってきた進化の歴史や現在の遺伝的なつながりなどが理解できます。また、外見で識別できないほど似ている生物を分類することができたりもします。我々はその技術を用いて水の中に棲む生物について調べてきました。最近の研究対象はカマキリ（アラレガコ）と砂浜

に生息しているアミ類です。

遺伝子を扱ってはいますが、自然環境を守ることを念頭に置いているため、野外活動にも力を入れています。今回は、しらやま地区の水辺と生き物を守る農家と市民の会が行った、この近所である、越前市丸岡町の溜池での外来魚駆除と生き物観察会に同行し、その池の魚類相を調査しましたので報告することとしました。

捕獲した魚類は6種でした。約半数は特定外来生物に指定されているオオクチバス（ブラックバス）で、様々なサイズが生息していたことから、何者かの放流後、溜池内で繁殖していることを窺わせました。在来種で優占していたのがカワムツとヌマムツでした。両者の識別が難しいため、今回区別をしませんでした。次に多かったのがドンコでした。アブラハヤも 1 尾見つかりました。これらはポンプアップ時に下流の吉野瀬川から運ばれてきたものでしょう。また、ギンブナが8尾生息していましたが、全て 20cm 以上のものでした。ギンブナは3倍体で全て雌です。他のフナの精子を刺激として発生が始まるとされていますが、溜池にはギンブナ以外のフナがいなかったために繁殖できていないのだろうと考えました。

*1：福井工業大学大学院応用理化学専攻

*2 ：株式会社環境アセスメントセンター　越前分室

*3 ：福井工業大学環境生命化学科

No.7

福井県ホタルの会

福井県ホタルの会活動概要

夜の川面を飛び交うホタルは、夏の風物詩ともなっており、人々の心を引きつけてきました。ホタルは、きれいな水、きれいな空気、きれいな緑など恵まれた自然環境の中に生きる環境指標生物です。

このような環境には、トンボ、メダカ、チョウ、小鳥など多くの生き物が住みつき、人と共生しながら多様な生態系が形成されています。ところが高度経済成長とともに、自然を破壊し、河川の水が汚れ、多くの生き物が絶滅の危機に瀕しています。

「福井県ホタルの会」は、ホタルを身近な生き物のシンボルとして捉え、人と自然が調和した、住みよい環境づくりを目的とするものです。また、本会は自然を大切にする人づくり、まちづくりも目指します。本会の主な活動は、社西小学校や熊川宿など、ホタルビオトープの造成、そしてそのビオトープを利用した環境学習、福井県各地でのホタル観察会などを行っています。また、近年では南越前町のホタルを活かしたまちづくり協力し、地域活性化支援を行っています。

本会では毎年 1 回、機関紙である「蛍」を発行し、各地域でのホタルの保護・増殖に関する取組みや、大学等の研究機関による学術的な研究結果など幅広い分野で情報交換を行っています。

会員募集中！！

ホタルを通して自然や環境、農業について一緒に考えませんか？

【お問い合わせ】
福井市久喜津町 65-23 社西公民館内
福井県ホタルの会　事務局
TEL＆FAX：0776－34―7910

No.8 河和田自然に親しむ会

河和田には、オシドリやゲンジボタルなどの豊かな自然がいっぱい。「この自然を未来に残したいね！」と 1992 年 4 月に誕生、18 年目です。

①みんなで見ることで守ることにつなげる。

②今取り組まないと失われる恐れのある自然を守る。

③人と自然が共生する持続可能な社会をめざす。

が活動基本です。

主な活動は、春の自然、ホタル、夏鳥、サマーキャンプ、きのこ、冬鳥の観察会や毎月第 1 日曜日（東部児童館）の観察会です。オシドリの日常観察、生き物調査、自然講演会や、オシドリサミットも行いました。

COP10 のテーマでもある「いのちの共生を未来へ」に通じる活動を今後も続けて行きたいと思います。

No.9 水辺と生き物を守る農家と市民の会

活動状況

越前市西部地域は、絶滅危惧ＩＡ 類のアベサンショウウオをはじめ、ハッチョウトンボ、メダカ、など数多くの希少野生生物が生息しています。水辺と生き物を守る農家と市民の会は、平成 16 年度から 19 年度に環境省の「里地里山保全再生モデル事業」のモデル地域として指定されことを受け、地域の保全活動を推進する母体として平成 18 年 8 月に水辺の会が正式に発足しました。

当会は、里地里山の生物多様性の健全回復を目指し、水田ビオトープ造成による希少種の保全、外来種の調査･駆除、そして豊かな自然環境を後世にわたり伝えていくため、小中学校での環境学習の支援も行っています。また本年4月1日当地域に40年ぶりに飛来したコウノトリ「えっちゃん」保護活動にも参加しました。

また、本年はクチバシの折れたコウノトリ「コウちゃん」が当地域に飛来して40年を迎えるにあたり、水辺の会が主幹団体となり、コウノトリ「コウちゃん」飛来40周年記念事業を開催します（写真 6，7）。現在我々は、水田生態系の頂点であるコウノトリを象徴に「再びコウノトリが舞う人と生き物が元気な里づくり」を理念に、活動しています。

絶滅危惧種アベサンショウウオ

ビオトープ作り

外来魚の分布調査と駆除

小中学校での生き物観察

くちばしの折れたコウノトリ「コウちゃん」

40年ぶり白山地区に飛来したコウノトリ「えっちゃん」

図 1

No.12　日本ビオトープ管理士会福井県支部

(1) 設立

当会は、平成20年5月に(財)日本生態系協会が主催する日本ビオトープ管理士会の福井県支部として発足しました。市民、企業、行政など、県内の自然環境に関する知識を有した人達が参加しており、ビオトープ管理士として、地域社会の豊かな自然環境を守り育む活動を行っていくことを目指しています。

(2) 支部活動が目指すこと

「ビオトープ(BIOTOP)」とは、その地域にすむ野生の生きものたちが自立して生息・生育できる、まとまった空間を意味します。ビオトープには、森林や農地・草地、河川や河原、池や湖沼、海や干潟など実にさまざまなタイプがあります。そこに、ある種の野生の生きものたちが加わることによって、自然のしくみである自然生態系が成り立ち、地域固有の自然が形づくられています。

わたしたち会員は、県内の各地に住んでおり、地元の人々の暮らしとそこにある環境や生きものに関する知識を持ち、これら地域の特性を身近に感じることができます。“ビオトープ”で大事な点は、地域の特性にあわせた知識と技術で、自然をサポートする意味での『つくり・守り・育てる』必要があることです。わたしたちは、福井の各地域に適したビオトープへの関わり方を提案できる有資格者として、積極的に活動していきたいと考えています。

(3) 活動内容

福井県支部では地域の身近な専門家として、地域住民の方々をサポートし協働して環境保全活動に取り組みます。

No.16　北日野地区自治振興会

北日野地区は南に越前冨士「日野山」、西に清流「日野川」が南北に流れ、中央を北陸自動車道路が南北に走り北に村国山を擁する　人口 4570 人　世帯数 1381 世帯の地域です。

純農村地域だった北日野地区も問屋団地やトラックターミナル、の開通などにより大きな変貌を遂げた。「万葉中学校」の開校、「仁愛大学」の開学により地域の様子も徐々に変化している。

このような中で立ち上げられた自治振興会は名実ともに地域のあらゆる面での牽引車として事業を展開している。和気藹々とした仲にも真剣な事業運営や検討を重ね「どんぐり山整備事業」や特色ある「環境パトロール」「町内整備事業」など地域に密着し、次の世代に残る活動を進めている。私たちが進める自治振興会事業の根底にあるのは「次の世代につなげること」ふるさとの豊かな自然を大切にしながら若い人たちが集い活躍できる地域づくりを目指しています。私たちの北日野には誇れる「山がある。川がある。人がいる」。

No.19 えちぜん環境楽

主に、越前市内で環境問題について楽しみながら興味を持ってもらえるような活動を実施しています。過去には落語家を招いて「環境落語」の講演を行ったり、環境ポスターコンクールなども行ったことがあります。

最近実施して好評だったのは、電気やガスのなかった、原始時代の暮らしを体験してみようという講座で、石器で肉を切ったり、木と木をこすり合わせて摩擦熱で日を起こすなどの体験を実施しました。

今年は「ハイジ・ペーターの暮らし体験」と題して、ヤギを連れて里山を散歩したり、太陽熱を使ってジャガイモを焼いて食べるという講座を行いました。

本日は、会場内で「日起こし体験」のコーナーを展示していますので、皆さんも、ぜひチャレンジしてください。

No.20 坂口エコメイト

田植えから草取り、稲刈り、わらを使ってしめ飾り作り、収穫したもち米で餅つき、かきもち作りという一連の流れをもった田んぼの体験と、田んぼは稲作りだけではなく「たくさんの命」を育む場所として、生き物観察会を行っている。

福井県代表として「こどもエコクラブ全国フェスティバル」や広島、東京で開催された「世界子ども水フォーラムフォローアップ大会」に参加するなど、大きな大会に参加することによって、全国の子どもたちの幅広い活動に興味を持つようになった。

先日、名古屋での COP10 の会場にて活動発表を行ったばかりだ。

No.21　坂口地区うららの町づくり振興会環境部会

里山ティーチャーとして、坂口校の環境学習やエコビレッジ交流センターで田んぼ体験講座のとき手助けをしている。収穫したもち米は坂口校の発表会のときバザーに出品し、図書費や教材費と変わる。

坂口地区の歴史遺産「馬借街道」の整備をする担当も任され、あわせて、地元のシンボルの山「矢良巣岳」の整備も行っている。

No.22　越前市エコビレッジ交流センター

- 坂口地区の豊かな自然環境を教材ととらえ、良好な環境の保全及び創造に資する担い手の育成と環境にやさしい地域づくりを進める。
- 環境学習の拠点施設として将来を担う人づくりの教育とともに、エコビレッジのシンボルとして地球環境にやさしい建築資材の採用や、再生資材の活用、太陽光を利用した省エネ設備を導入するなど、環境に配慮した施設とする。
- 環境に関する講座の企画運営
- 施設見学者、団体に対する対応
- 体験学習希望団体受け入れ
- 環境学習リーダーとなる人材の育成
- 環境情報の受発信

No.23 坂口菜の花グループ

平成 19 年 5 月に立ち上げた「学校給食支援グループ」。

月 1 回のリーダー会議や野菜作りの勉強会を開催するなど、安全でおいしい農作物を子ども達に提供することを目的に作られたグループ。学校給食の他に特産品の開発やいろんなイベントに出店し、野菜や山菜を販売している。

No.25 JA たんなん・今立有機農業研究会

平成 6 年、今立町（当時）内の有機・減農薬栽培農家によって結成。

当時より JA が事務局を務め、現会員数は 20 名。

- 有機・減農薬栽培技術への取組み、普及。
- 南越中学校との食農教育への取組み（田んぼの学校）。
- 河川の水質向上、浄化試験。
- 農業体験（グリーンツーリズム）の受け入れ

などを通じ、環境調和型農業の確立と理解を深めるための働きかけを続けてきた。

No.28 市民参加の森づくり「郷の森 里楽」の会

森林ボランティアによる里山の保全再生活動

放置林と化している里山をかっての人間とのかかわりでつくった宝物＝里山に戻すための森林ボランティア活動を始めました。

活動の場[郷の森里楽]は、越前市西部の丘陵地に位置し、自然豊かな、のどかで美しい景観の広がる農山村にある市有林の一部 14.3ha です。

こゝ越前西部地域は、国内第一級の絶滅危惧種ＩＡ のアベサンショウウオをはじめとして、希少な野生生物が多く生息しているとして、国の重要湿地500選、県の重要湿地30選の最高位の里地里山に選定され、2004 年には環境省の「里地里山保全再生モデル事業」実施地域として全国4か所の一つにも選ばれた日本でも有数の生物多様性に富んだ地域です。しかしこの地域においても現在少しづゝ自然が蝕まれつつあることが危惧されています。

【 ボランティアの名称 】市民参加の森づくり「郷の森里楽」の会

【 会 員 数 】63名（H22.4.1 現在）

【 活動場所 】福井県越前市安養寺町の「みどりと自然の村」周辺の市有林

【活動内容等】活動エリアを「活動拠点ゾーン」、「森づくりゾーン」、「学習・体験ゾーン」、「水辺ゾーン」、「森の恵みゾーン」の五つのゾーンに区分し、里山林整備を行っています。整備には、ハードプログラム（森林等の保全・整備）、ソフトプログラム（森林等の利用）、活動拠点・基盤づくりの三つのプログラムにわけ、無理なく、楽しみながら森づくりができるプログラムを用意しています。

不法投棄物の回収

アプローチ道路の整備

拠点づくり（物置兼休憩所）

森林づくり（広葉樹の植林等）

ビオトープづくり

湿地の木道づくり

キノコ栽培（シタケ、ナメコ）

体験学習（エコキャンプ等）

地元イベントへの協力

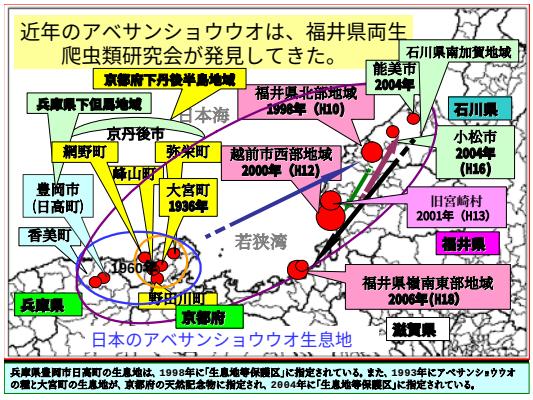
No.30　　福井県両生類爬虫類研究会

SATOYAMA の希少種を守る！

SATOYAMA の野生生物は、都市化･高齢化･エネルギー革命･農林業環境･構造変化･里山荒廃･耕作放棄等で年間 4 万種が絶滅している。1998 年のアベサンショウウオ研究会を改称し、2000 年に、絶滅危惧ＩＡ 類であり、「種の保存法」に両生類で唯一記載されているアベのみならず両生爬虫類全般の保護増殖事業を主に展開する目的で結成された。

【会員数】128 名（H22.5.1 日現在）　【活動地域】兵庫県から石川･富山県までの日本海沿岸地域

【活動内容】･日本の両生爬虫類研究･資料収集･日本の各大学との共同研究･生息状況調査･生息地保全再生活動･外来種駆除･社会教育･環境教育　支援･啓蒙活動（学会発表･フォーラム開催）



【連絡先】ganchan2@gh.ttn.ne.jp　福井県両生爬虫類研究会　長谷川巌　TEL090-8965-5398

No.31 たけのっこ劇場

劇団たけぶえより独立した保護者主体の団体です。

演劇を通して環境、年齢の異なる子供達が互いに協力し合い、地域の人達と交流する中で一つのものを創造していく体験事業です。子供達に、自主性、協調性、コミュニケーション能力、感性が養われるような事業になるよう、心がけております。

今回初の完全オリジナル作品を作り上げました。原作、脚本はたけのっ子の代表、大谷由紀子。演出は、たけのっ子劇場保護者一同です。題材は、有機農業をテーマとし「ノトリコの木」はコウノトリから、名前をもじり、木の形も稲のような形にしました。種族の共存や、薬害、食物連鎖や、自然の摂理と循環の大切さなどをとりあげた、幻想的で壮大なファンタジーです。

今回は、有機農業がテーマと言うこともあり、子供たちに自然環境の大切さや、農薬の恐ろしさ、生き物の絶滅の危機などを学んでもらう目的もあり、白山の田んぼサポーターに参加させていただきました。

No.33 環境ふくい推進協議会

福井県では、平成21年度より、身近な自然を守り育てるための県民運動「自然再生ふくい行動プロジェクト」を開始しました。

子供だけで手軽に行くことができる身近な場所に、生き物にふれ合える自然がありますか･･･？昔は当たり前に身近にあり、当たり前に子どもたちが遊んでいた自然が今失われています。未来を担う子供たちに様々な生き物とふれ合える自然を残したい

と思いませんか？このプロジェクトは、近くの小川や田んぼ、家の周りなどで失われた“生き物のにぎわい～生物多様性～”の再生と、子どもたちの遊び場の再生を目指しています。

　未来を担う子どもたちのために、身近な自然の生態系を守り育てるために･･･さあ、はじめよう！自然再生ふくい行動プロジェクト♪

取組み発表

平成 22 年 11 月 6 日　15：30～16：10

発表者　3 名

鶉の里調査隊の活動紹介をする久米田健二氏

えっちゃんの活動について発表する、神門博文王子保小学校ＰＴＡ会長

水辺と生き物を守る農家と市民の会の活動紹介をする田中和夫副会長

発表者

「鶉の里調査隊　活動報告」

久米田　賢治　氏　（鶉の里調査隊副隊長）

福井市の北西部に位置する鶉地区は、2005 年には野生のコウノトリが、2009、10 年には放鳥コウノトリが飛来した場所です。

豊かな里地の広がる地区のことを学び、子どもたちに伝えることを目的に結成された「鶉の里調査隊」。

派生した環境保全活動は、地区の多くの住民を巻き込んだ活動につながり始めています。この度は、鶉の里調査隊の活動報告と理念についてお話ししたいと思います。

「えっちゃんのエサとり大作戦」

神門　博文　氏　（越前市王子保小学校 PTA 会長）

「みんなでコウノトリのえっちゃんに、エサ場をつくって、ごちそうをあげよう」と王子保小学校ＰＴＡが活動したのは、王子保地区への滞在 87 日目であります 6 月 27 日の日曜日。総勢約 100 名の親子たちなどが集合し始めると、不思議と、雨模様の天気が急に良くなり、とても気持ちのよい日となりました。エサ場づくり１チーム、川魚ゲット１チーム、オタマジャクシゲット２チームがそれぞれの場所に移動して、大人たちは、和気あいあいとエサ場づくり。親子たちも泥まみれにもなりながら、楽しくたくさんのエサをゲット。そして、出来上がったエサ場の中に、たくさんのごちそうをみんなで一斉にプレゼントしました。忘れることができない良き思い出となりました。

「水辺と生き物を守る農家と市民の会活動紹介」

田中　和夫　氏　（水辺と生き物を守る農家と市民の会副会長）

福井県越前市西部の白山（しらやま）・坂口地区には、絶滅危惧種であるアベサンショウウオをはじめメダカやゲンゴロウ、ハッチョウトンボなどの多くの希少な野生生物が生息しています。これらの希少種を保全し、人間生活との共生を図り、自然・農業そして文化等の相互作用によって、人も生き物も元気な里地里山づくりを目指し活動しています。

会員は、地元農家を中心に、地域自治振興会・区長会・土地改良区や農協・小中学校・活動団体・専門家等、多様な主体が参加しています。

「再びコウノトリが舞う人も生き物も元気な里」を目指し、田んぼサポーター事業、ビオトープ整備や外来種駆除などの環境保全活動、悪質な採集等の監視活動、小中学校への環境教育支援活動を展開しています。また、生物多様性保全や無農薬農法に積極的に取り組みたい方の募集し、里地里山保全に取り組む人々との積極的な意見交換を行い、取り組みを全国に広めています。

<パネルディスカッション第１部>

「コウノトリが舞う里作りパネルディスカッション」

平成 22 年 11 月 6 日　16:10～17:30

テーマ:「コウノトリの放鳥そして定着に向けて」

コウノトリが舞う里づくりシンポジウム１の様子

■ パネリスト

松島　興治郎　氏　（豊岡市立コウノトリ文化館名誉館長、兵庫県コウノトリ保護・増殖（野生化）対策会議委員）

1941 年生まれ。豊岡市立コウノトリ文化館名誉館長。豊岡高校在学時に生物部に所属し、コウノトリの調査に参加。高校卒業後は農業や鞄製造業に従事していたが、1964 年に但馬コウノトリ保存会事務局のボランティアとしてコウノトリの調査と捕獲に係わり、翌年から保存会事務局職員としてコウノトリ飼育場に勤務。以来一貫してコウノトリの飼育に携わった（1981 年からは豊岡市職員）。四半世紀に及ぶ苦難を乗り越え、1989 年の初の人工孵化成功、2005 年の自然放鳥へと導いた。2006 年からコウノト

リ文化館長。2010 年から現職。

兵庫県功労賞、神戸新聞社平和賞、文部科学省地域文化功労賞、第 40 回吉川英治文化賞等多数受賞。

菊地　直樹　氏　（兵庫県立コウノトリの郷公園研究員、兵庫県立大学自然・環境科学研究所　講師（環境社会学））

1969 年生まれ。兵庫県立大学自然・環境科学研究所講師／兵庫県立コウノトリの郷公園研究員。環境社会学の視点から、コウノトリの野生復帰プロジェクトに参画している。2002 年、コウノトリの聞き取り調査を実施し、2006 年には地域住民の視点から野生復帰をとらえ直す『蘇るコウノトリ－野生復帰から地域再生へ』東京大学出版会を出版した。人とコウノトリのかかわり、コウノトリを軸にした地域づくり、市民と専門家とのコミュニケーション等をテーマに活動と研究をおこなっている。

西村　いつき　氏（兵庫県農政環境部農林水産局　農業改良課環境創造型農業専門員）

兵庫県生まれ。京都府京丹後市在住。神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程前期修了、教育学修士。現在、神戸大学発達科学部ヒューマン・コミュニティ創成研究センター労働・成人教育部門研究員。「地域には地域を救う地域資源ある」を信条に地域農業の振興に取り組み、養父市では、おおや高原有機野菜部会を天皇杯に導き、豊岡市では「コウノトリ育む農法」確立普及を推進。2004 年「兵庫県知事賞」、07 年「日本農業普及学会功労賞」、環境と経済の融合が関西経済会（関西経済連合会及び関西経済同友会）からも評価され 2009 年「輝く女性賞」を受賞。消費者教育や環境教育に「コウノトリ育む農法」を取り入れ、ＥＳＤ（持続可能な開発のための教育）の観点からも評価を受けている。

現在「兵庫県環境創造型農業推進計画」を全県下に推進中。

好きな言葉：「天の時・地の利・人の和」「地域には地域を救う地域資源がある」「至誠天に

通ず」

松村　俊幸　氏　（福井県安全環境部自然環境課主任）

子どもの頃から動物好きで、猛禽類と里地の水辺環境をこよなく愛す。1990 年より福井県自然保護センター、2002 年には福井県海浜自然センターに勤務し、2004 ねんからは、福井県安全環境部自然保護課（現自然環境課）で、里地里山の生物多様性の保全再生やクマの人身被害対策等に従事。一番の目標は、コウノトリを呼び戻し、湖やため池の自然を保全再生し、ウェットランドネットワークを形成すること。

堀江　照夫　氏（水辺と生き物を守る農家と市民の会会長）

1936 年生まれ。越前市在住。

「しらやま振興会」自然環境部にて地域環境活動に取組む。また、越前市環境団体にて活動を展開する中で、2006 年「水辺と生き物を守る農家と市民の会」発足時より、会員として希少生物（アベサンショウウオ）の保全、並びにビオトープや子供たちへの体験学習に取組む。

2009 年より「水辺と生き物を守る農家と市民の会」会長に就任。

■ コーディネーター

山下　裕己　氏（福井新聞社論説主幹）

1953 年生まれ。越前市在住。

1975 年福井新聞社入社。

連載企画「豪雪を記録する」「福井人へ―活性化新機軸」などを執筆。文化生活部長、社会部長などを経て論説委員室へ。現在、コラム「越山若水」を担当。

【パネルディスカッション内容】

テーマ：コウノトリの放鳥定着に向けて
コーディネーター：福井新聞社論説主幹　山下裕己　氏

○コーディネーター（山下裕己）

皆さんこんにちは、いろんなお話とかをお伺いしてコウノトリが住める地域づくりというのを種々考えていきたいと思っております。

今日、兵庫県の方だとかですね、福井県の方々とか5人のパネリストをお迎えしておりますので、このパネリストの方々と一緒に、コウノトリが住める里づくりについて私たちが何をすればいいのかというのを考えていきたいと思います。

ちょっと私ごとですが、生まれも育ちも住まいもこの白山なんです。40年前はですね、コウノトリの報道があった時期はですね、実は私は高校生でして、その当時この地域の高校生は、大体武生に下宿するというふうなことだったので、実際にコウちゃんを目にしたことはありません。しかしながらこの白山のことを聞いて、今日コウノトリのコウちゃんを、きっかけにしてこういう形で交流等を務めさせていただくということで、あと40分間ほどよろしくおつき合いのほどをお願いいたします。

それでは、今日お話をしていただくパネリストの方を紹介したいと思います。

こちらのほうから、5人の方を紹介させていただいて、それぞれ自己紹介をお願いしたいと思います。

まずはですね、豊岡市立コウノトリ文化館名誉館長、兵庫県保護・増殖対策会議委会でいらっしゃいます松島興治郎さんです。

それじゃあ、松島館長、自己紹介をお願いします。

○　　パネリスト（松島興治郎）

皆さん、こんにちは。

既に、オープニングでご紹介いただきました、豊岡市コウノトリ文化館の松島でございます。

今日は、大変みんな元気にコウノトリに取り組んでいただいております皆さんの前で、少しお話しさせていただくということで、報告させていただきます。

最初に、自己紹介を兼ねて、コウノトリ、武生のコウちゃんを預かってまいりました当事者として

現状などご紹介させていただきたいと思います。

私が主にかかわりましたのは、最初コウノトリを絶滅から何とか残そうということで豊岡市でやりましたコウノトリの人工飼育、いわゆる増殖事業というものが始まったときからでございます。全く素人でございましたが、いろいろな事情があって、私がこの任についたわけでございますが、大変な事業の任務についてしまったという思いもございます。

そんな中で、当時この武生市に飛んできたコウノトリですが、私たちが事業を始めて、一生懸命にコウノトリの増殖のためにやって、なかなかうまくいかないので、もう環境の中で、既に鳥が弱ってしまったものを飼っていきながらやってきたわけでございまして、武生でもコウノトリが飛んできたという情報をいただきました。その中で、武生の皆さんが一生懸命保護をされており、白山地域の小学生の皆さんが特に一生懸命保護をされているという情報も聞いておりました中で、保護されるということが入ってきて、その保護に立ち上がったときっかけが、武生のコウちゃんだったんですね。後で私が勝手に、私もまたこうちゃんなもんですから、コウちゃんを武生ちゃんというふうに名前は変えてしまいましたが、その武生ちゃんのお話を少しさせていただきます。

これは、武生のコウちゃんが飼育場にやってきたときです。先ほど、最初に武生の林武雄さんが保護されましたけど、武生の皆さんに送っていただいて、列車で豊岡の地に移送してもらい、飼育のケージに入りまして、少し長旅で弱っておりましたし、くちばしの状態なんかで体の調子も思わしくないというふうな情報ももらいましたが、間もなく少しずつ回復をしてまいりました。しかし、くちばしの不調の心配やそれから外部寄生種に大変悩まされとる様子を見ましたときに、このコウノトリを育てるのは大変厳しかったわけでございます。くちばしが既にもう折れており、傷ついております。それを少しずつ補正してやりながら、見守る中でどうにかえさがとれるようになって、元気も回復してまいりました。最初は、上のくちばしを少しずつ切り詰めて、下くちばしにそろえました。また上のくちばしが伸びてまいりましてですね、しかしこのころになりますと、何とか自分でえさがとれるようになり、だんだんと回復する様子が見られました。

このコウノトリは、最初オスじゃないかなというふうな感覚がありましたが、詳しく調べましたところ、メスということがわかりましたので、どうにかいい相手を見つけて、私たちの助っ人として頑張ってほしいということで、いろいろとその後お見合いをすることにして、ペアづくりに励んできたわけでございますが、なかなかうまくいかないままに日ばかり過ぎてきてしまったわけでございます。

そんな中で、ようやく平成2年、偶然に隣に飼育していたオスのコウノトリがいて、これは東京の多摩を経由してきましたので多摩ちゃんというふうに言っておったんですが、中国経由の鳥

でございます。この鳥のケージの中に潜り込んでしまって、私たちを一瞬びっくりさせたんです。コウノトリというのは非常に気性の荒い鳥同士ですので、何か事故があったら困るということで駆けつけたんですが、そのとき既にこの鳥同士が相思相愛の仲でして、もう私たちも驚くようなことで、この武生のコウちゃんが私たちに大きな希望と大きな力をくれたわけでございます。次の年から卵を育て始めたんですが、もうなかなか卵がうまくかえらないこの年月が幾らか続いたのも事実でございます。

そんな中で、ついに平成6年になりましてですね、長い年月を待った中からやっとひなの誕生を見ることができました。これも、その年3回目に産んだ卵の中の1つから生まれてきた卵なんですが、親のもとではなかなかうまく育たないということで、今までの経緯をふまえて、人工ですることになりました。人工飼育でどうにか1羽のコウノトリを育てることができたわけでございまして、コウノトリに私たちは、武生に非常に由来が深い紫という名を使わせていただいております。そして紫が昨年何と孫3羽を産んで育て、孫3羽の誕生になったわけでございます。これが、その3羽たちでございます。ですが、このうちの1羽は、不幸にして放鳥された後、三重県のほうで死亡するという悲しい出来事を私たち知りました。これがその生きていた時のものです。

その後、この武生でございますが、34 年間私たちも本当に苦労した年月を長く支えてくれ、そして希望の道をつけてくれた、この武生のコウちゃんにつきましては、平成17年に、子と孫4羽と交代するように天寿を全うして逝ってしまいました。このコウノトリとペアだった鳥も2年前に、老齢のために亡くしてしまったわけであります。最期には、コウちゃんは、部屋の中で保温してやるなど処置が必要なほどでしたが、非常に長い年月私たちのために大きな希望を与えてくれたこの武生のコウちゃんを送り出していただきましたこの白山の人たちの思いに対して、少しコウノトリは報いてくれたのかなあというふうに思います。

長い年月の中で、コウノトリの復活の流れの中で、この武生の存在というのは大きなものがあったということを皆さんにご報告して、皆さんの最初のごあいさつとさせていただきます。

○コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

コウちゃんの長い歳月、歴史というのをご紹介していただきました。

続きましてですね、お隣にですね、兵庫県立コウノトリの郷公園研究員でいらっしゃいまして、さらに兵庫県立大学で環境社会学の講師をしていらっしゃいます菊地直樹さんです。よろしくお願いいたします。

○　　パネリスト（菊地直樹）

私はですね、99年からこのコウノトリの野生復帰プロジェクトに関わっております。専門が環境社会学ということなんですけども、これは社会がどう環境と関係を持って社会に影響を及ぼしてきたのか調べるということです。

何をしているかですが、人とコウノトリがどういうふうにかかわってきたのか、そういうことをお年寄りから話を聞いて、それをまとめていくというプロジェクトでありますが、ところが最近は、コウノトリの研究をしたり、地域づくりを実践したり研究したりしているとか、あとですね、市民と専門家の間のコミュニケーションをどのように形成して行く場をつくる活動しているとこです。

コウノトリですけれども、こういう鳥でして、体長が 2m から 2m50cm、体高が 1m から 1m20 cmくらいあるんですね。まあ、そのくらい大きな鳥で中でも極東すむに固有種です。餌生物は肉食性で魚類や小動物などそういうものを食べます。

これは、コウノトリの郷公園です。来られた方がいらっしゃるかもしれませんが、こういう活動をしております。

1つはですね、コウノトリの種の保存と遺伝的管理ですね。2つ目が、野生化に向けての科学的研究及び実験的試みという科学なんですけどね、3つ目が、人と自然の共生できる地域環境づくりの場をつくっていくという、遺伝的な管理などのハード面、自然体験に加わるなどのソフト面、ヒナの孵化などのハッチーズこういう 3 つを同時にやれると言うのが、このコウノトリ郷公園という施設だという気がします。

それとですね、2005年、5年前から放鳥をやっていっております。

この上のほうはですね、ハードリリースと言う方法で、こういう箱からコウノトリを放しています。先ほど市長さんから話がありましたけれども、こういうやり方です。それともう一つは、そういう田んぼの中に簡易のケージをつくって数カ月間飼ってみて放してあげる。この方法をソフトリリースと言います。コウノトリを環境に慣れさせていって、即定着できることが考えられます。

このソフトリリースという方法は、地域と一体となって行うということが特徴でして、そういう意味で必ず子供たちが来て、一緒に活動し放鳥してきているところがあって、これがそうですけれども、子供たちがコウノトリのケージをあけて、そこでコウノトリが飛んでいく、そういう地域と一緒にそして地域を越えた教育を意識した方法です。

それでは、コウノトリがどういう環境を象徴しているかということですけども、例えば河川では、こういうことが駄目なんだとか、あるいは繁殖の面であります。これは、ハチゴロウの戸島湿地なんですけれども、もうひとつは我々に身近なと言いますか、例えばこれは、電柱に巣をかけることがあるんですね。これはどういうことなのか、私たちが目指す風景がどういうものなのかということを

考え出してくれることもあります。

こういうふうにですね、いろいろに私たちにとって普通のところに居ることによってですね、例えば川は水を動かすだけでなく、生き物がいっぱいであるですとか、そういうさまざまなことを、さまざまな価値を生み出す、それがコウノトリなんです。

そういう本当に私たちにとって身近な鳥ですから、実は地域での活動をコウノトリが教えてくれる。例えば子供ですね、こういう田んぼの学校と言うのが市長の話にもありますけども、そういうことだったり、あるいは生き物を市民が調査をするとかですね。市民があるいは子供たちが自分達の環境を自分達で実際に調べるとか、あと湿地を実際に作っていくなどということもわかると思います。

ここではですね、非常に身近な環境になった結果、コウノトリも住むことを受け入れることができるんじゃないかなあと思います。そのようなですね、自然保護そのものと言う部分もありますけども、やっぱり社会とか文化だとかも、資源として利用できるんじゃないかということを一緒に考えていく、そういう目的が定着にはあるのではないかなと、考えております。簡単ですけども、私がやっていること、あと考えていることを紹介させていただきました。

○　　コーディネーター（山下裕己）

菊地さん、ありがとうございました。

コウノトリの郷公園の紹介とかですね、そういう内容を紹介していただきました。

そのお隣ですが、西村いつきさんです。兵庫県の農政環境部農林水産局で環境創造型農業の専門員の先生でいらっしゃいます。よろしくお願いいたします。

○パネリスト（西村いつき）

失礼します。ただいまご紹介いただきました、兵庫県農政環境部農林水産局農業改良課の西村です。座って失礼します。

では、私は環境創造型農業専門員という役職をさせていただいているんですが、兵庫県では昨年、兵庫県環境創造型農業推進計画という計画を策定をいたしました。これを世界の農業の動きの中で、兵庫県では環境創造型農業を兵庫県農業の基本として進めていこうという計画に基づいております。

平成15年から、私はコウノトリプロジェクトチームということで、コウノトリ野生復帰に関与してまいりました。先ほども菊地先生のほうからお話がありましたように、コウノトリの野生復帰事業が本

格的にスタートしてみますと、コウノトリの絶滅の要因になりました農林業の変革が求められました。私がプロジェクトチームに参加した当初は、まだまだ豊岡の市民の大勢の方、コウノトリの野生復帰に対してある意味無関心でしたし、コウノトリのために農薬を使わない農業を推進しようと思っても、なかなか難しい状況でしたし、地域に入っていろんなお話をしましても、「あんたら行政は、わしらよりもコウノトリのほうが大事なんか。」というような反発の声もいっぱいありましたし、また県の組織の中でもまだまだ技術確立ができておりませんでしたので、こういうことを本当に農家の方にも説明することがいいことなのかどうかというのが、いろんな疑問を抱えながら、それでも兵庫県がコウノトリの野生復帰のためにすごいたくさんの税金を使っておりますので、これを地域活性化に守り立てていこうということで、コウノトリ育む農法の確立をすることにしました。

この農法は、お米をつくるだけではなくて、コウノトリのえさ場としての水田を使っていこう、機能を果たしていこうということで、まず冬の田んぼに水を張る冬期湛水、また深水管理でカエルを増やす一方で生き物を増やすという、中干し延期と言うのをしてきました。こうした水管理をすることによって田んぼの生き物を増やすというものです。

こちら側が、育む農法をやっとるご圃場ですが、あとこちら側がコウノトリがやってきた地域ということで、見ていただきましたとおり、コウノトリはしっかりとこの田んぼにやってきている。

これは、幼鳥がやってきているところなんですが、幼鳥ほど育む農法の田んぼにやってきているということがわかります。

育む農法といわゆる慣行栽培でございまして、若干収量が劣るんですが、それでも少々皆様に買い支えていただいて、志向性を確保していただくようになっています。また、農薬や化学肥料のような費用の直接経費は少ないんですが、こうした水管理をしたり、除草に時間がかるという労賃が高くなります。それでも、通常の米づくりの場合、どうしても赤字になってしまいますが、育む農法は若干黒字が出てくるということで、大規模農家や集落営農の農業に熱心な地域の方に育む農法に取り組んでいただいています。

この農法は、比較的天候に左右されにくい農法になっていまして、慣行栽培の場合はよくできる年とできない年があったんですが、育む農法の場合は、しっかりと個数栽培をしていけば収入もある程度、気象に左右されずに出てくる特徴はあります。

年々、面積もこんなふうに増えています。

育む農法では、理事会をつくりまして、自治研さん等と情報の交換をしています。

最近、面積が増えてまいりまして、育む農法を初期からやっていただいている専業的な農家の方を対象にアドバイザー農家として、農家の方が農家の方を指導する体制づくりや、また県

の職員、JAの職員、市の職員が育む農法を理解をして、地域の皆様に少しでも理解を広げるようにという職員研修も行われています。

また、育む農法では、やっぱり買い支えていただかないということで、量販店さん、こういうとこにいろいろな企画をして、農家の支えをしていただいています。

多くの量販店さんがお米を買うという感覚ではなくて、コウノトリの住む地域を企業が支援するんだというふうな感覚でお米を買ってくださって、なおかつ収益金の一部をコウノトリ基金等に寄附をしてくださっています。

このように、コウノトリをシンボルに新たな地域農業が展開されるということで、魚沼に負けない米価の実現ができましたし、市長の話の中でもあったと思いますが、環境学習のほうから郷土愛をはぐくむという取り組みも生まれてきますし、お米以外の農産物についてもコウノトリブランドということでブランド化できています。

○コーディネーター（山下裕己） どうもありがとうございました。

兵庫県豊岡市の環境調和型の農法について説明をいただきました。

そのお隣につきましてはですね、福井県安全環境部自然環境課職員の松村俊幸さんです。どうぞよろしくお願いします。

○ 福井県安全環境部自然環境課（松村俊幸）

ただいま紹介いただきました、福井県安全環境部自然環境課職員の松村と申します。どうぞよろしくお願いします。

私のほうはですね、自己紹介をやりまして、少し日ごろからちょっと思っていること、福井県の現状をですね、簡単に説明させていただきます。

私、なぜかですね水辺の生物が好きなんです。水辺の生物が好きなんですが、本当のところ、なぜ水辺の生物が好きなのか、よくわからないところがあった。自分の心の中なんでよくわからなかったんですが、ただ一つ、水辺を見ていると余りにもひどいなと思うことがよくあったんです。なぜかというと、水辺の生物というのは、我々の身近なところにいて、そしてその中にですね、いろんなご先祖様から受け継いできた原風景が急激に失われてしまった現実を見るとですね、やはり何とかしなきゃいけんじゃないかという考えが、どうもよくあったんですね。それの一つとしてね、まずここにあります、この絶滅した生き物ですね、内容を見てみると、コウノトリとか、トキだとか、カワウソというのは絶滅しているといわれていますが、実は本当に身近なところにおりまして、コウノトリやトキが絶滅に至ったということは、皆さんもうかなりご存じだと思いますが、最近、文献によりますと、実はカワウソも田んぼのわきのほうで生息したことが書かれていました。これ非常

に衝撃的でした。カワウソも田んぼの近くに生息していた時代があったんだということです。それを要するに我々の祖先が100年、200年あるいは100年から150年の間に全部壊してしまったということです。

こういった、どちらかというと水辺の生態系の頂点に必要な大きな生物が消えていくっていうのは、生態系が変化している一つの情報なんですが、最初にもっとひどいことが起こるんです。大きな生きものじゃなくても、消えていってしまう。実は、これ見ると、日本は秋津州といわれるほどトンボ類が豊かでした。それが、ここにありますように、種数を見ていただきますと、実際に非常に多いんだなと、その中で、残念ながらですね、もう見られない原風景として一つ上げられておりますのは、ここにありますヤンマのたそがれ飛翔と言う現象です。要するに夏の夕方5時過の原風景。夏の夕方にですね田んぼないし湿地の空を見上げますと、何万もの無数の群れ飛ぶヤンマが山すそに無数に来ている。そういう光景が実は里地の夕暮れの風景だった。

ところが、今ヤンマの集団飛翔は消えてしまってもう見られないです。実は私自身も大人になってから3回ぐらいしか見たことはないが、いずれもその3回見た場所は全てなくなってしまったという話をですね、専門家の方が説明してくれた。ですから、こういった風景を、失ってしまっているっていうことを、できるだけ多くの人に伝えて、何とか残したいということで、もう一つさらにこういうことをご指摘くださいました。

ゲンゴロウという誰でも知っている虫がいるんですが、この虫がですね、やはり非常に危ないと言われていると、いろいろ専門家が教えてくれる。ゲンゴロウというのは、ここにありますように、体長3センチぐらいで、体の両わきに黄色い筋のある虫なんです。ゲンゴロウという言葉は知っている。ところがですね、この大きな虫をゲンゴロウというふうに知っている人は余りいないと思う。ちっちゃな1センチぐらいのゲンゴロウは知っているが、実はゲンゴロウっていう虫はちょうど3センチぐらいの大きな虫でしてね、あちらのほう、左側のほうを見ていただきますと、あれはですね、実は口にドジョウをくわえています。わきにいるのはメダカです。大体ですね、ゲンゴロウって3年ぐらいで10センチぐらいになる。これほど大きな虫は、田んぼにしかいないんです。これは田んぼに行かないと見られない。かつての里地には、普通に見られた原風景なんですが、残念ながら、それはほとんど消えてしまった。

この写真はですね、実は白山地区で撮ったものなんです。私は非常に感動しました。でも、その場所はもう既になくなりまして、この風景はもう見られないんです。実は、田んぼの中のゲンゴロウの姿が文献に書いてあるんですが、私自身も見たのはたったの1度、この白山地区だけで。そうこうしないうちに、見つけた場所は次々失われてしまっているこの現実に何とかしなきゃいけ

ない。

今は、私もどちらかというと、感覚的なお話なんですが、実は福井県にですね、レッドデータブック、絶滅に瀕している生き物をまとめた本があります。この本の中に上がっている種類について少し分析しております。

全部で843種類ありますが、この中ですね、非常に絶滅危惧種の割合の大きいところが6個あったんですけど、実は植物も多いんですが、植物というか、水草ですね、福井県で見つかっている種の50％が絶滅に瀕しているんです。

それからもう一つ、次に非常に割合が高かったのが魚。魚が36％います。これはやはり水辺の生物が危機に瀕している、やはりレッドデータブックの選定結果から明らかということなんです。

そういった現実を見据えながら、我々は里づくりを行う必要があるというふうに思います。私自身はこういったことがこうじて私の水辺にこだわらず色々動きがあるのではないかと言うことです。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

松村さんのほうから現在の生物の状況についてお話をいただきました。

それでは最後になりますけれども、今日のですね、実行委員長でもあるんですけど、水辺と生き物を守る農家と市民の会会長堀江照夫さんです。よろしくお願いします。

○　　堀江照夫氏（コウノトリが舞う里づくり大作戦実行委員長）

今ほど水辺という言葉が出てきたんですけども、私は水辺と生き物を守る農家と市民の会ということに携わらせていただいております。座らせていただきます。

ちょっと先ほどの、この写真は若須岳のほうから白山一円を見た絵でございます。また、ここにコウノトリが舞っているんですけど、このコウノトリは希望のコウノトリという形で、「是非こうあってほしいな」というふうな形で主役にさせていただきました。

この白山地域には、非常に生き物がたくさん生息しているという形で、特に我々水辺と生きものを守る農家と市民の会では、このアベサンショウウオという絶滅危惧種のＩＡに指定されている生き物でございますけれども、これを保全していかなければいけないというような形で、活動を展開しているわけでございます。

まず、これはこの後ちょっと出てきますけども、今のアベサンショウウオを保全していかなければいけないということから、保全をしてくための希少野生生物保全指導員という方々を委嘱しま

した。これは、県の色々なご指導とか、あるいは専門の先生に依頼しながら勉強会をしたり、あるいは実際に水辺まで行きまして、このアベサンショウウオの産卵の状況調査という形で活動をしたわけでございます。

我々はよくこの地域も水辺の原風景というふうな言葉を発していっておりますけども、先ほどは、水辺の会の副会長の田中さんのほうからが活動についてご報告をさせていただいたんですけども、実際水辺の会というのはどういうふうな生い立ちであるかということでここにあらわしているわけでございます。

もともとは、県の人とメダカの元気な里地づくりビジョンが策定されまして、その後に、環境省の里地里山保全再生モデル地域という形で全国4カ所選ばれました。特に越前市の西部地域、あるいは神奈川の秦野市とか京都府北部地方とか、そういう形で4カ所あったんですけども、その一つに選ばれたということと、今先ほどの希少野生生物保全指導員制度を設けたというふうなこともありまして、それらを総括的に水辺の生き物を保全していこうということで、水辺の生き物を守る市民の会が設立をさせていただいた。これは18年に発足をいたしました。

私どものこの水辺の会の活動につきましては、5つの任務があるんです。その5つは、例えば希少野生生物が生息する里山生態系、希少種の保全及び調査研究、あるいは、2つ目には小･中学生と住民の環境学習と自然体験の活動、3つ目には希少野生生物保全指導員、村の達人の発掘、育成、それから4番目には地域外の人との交流と協働、情報発信、グリーンエコキャンプとかそういうものの支援という活動とか、あるいは希少野生生物を付加価値とした商品づくりや仕事づくりの推進というふうな形で、このようなことを活動しております。

活動に当たっての運営体制ですが、ちょっと硬苦しい形になっておりますけども、こういうふうな形の運営体制をとりまして、活動しているというな形でございます。

先ほどから言っておりますように、田んぼは、生物多様性の根源の場所であるということもありまして、我々は、田んぼは米づくりの場だけではなく、生き物の宝庫であるというふうな形で、こういうものを中心に徹底をしております。

今、こういう展開につきましては、やはり未来志向の展開でやるべきなんです。ただ、水辺の生き物を育む活動だけではなく、それらを未来につながっていく子供さんたちに環境学習というものを進めていかなければいけないということで取り組んでおります。

こういう田んぼづくりとか、あるいは有機農法の稲づくりとか、そういったことを学校に出向かせていただきまして、いろんな環境のお話をするとか、みんな多々の展開をしております。

今後の活動の分野でございますけども、こういう希少野生生物の再生活動･体験あるいはコウ

ノトリをシンボルとした食材の開発など、ちょっと粗っぽい説明でございましたけど、時間の関係で細かい部分を省略させてもらいましたけれども、田んぼに生きる未来に向けたという形で、心情的には人も生き物も元気な里地づくりを目指すといった形で活動しているわけでございます。

以上です。

○　　コーディネーター（山下裕己）

堀江さん、ありがとうございました。

今ですね、パネリストの方々と活動とかですね、県内の生息状況とかを含めてですね、自己紹介を兼ねてお話ししていただきました。

そして、今兵庫県の中で取り組んでいらっしゃるコウノトリの郷公園の活動のところで、コウノトリ育む農法とか、この白山、坂口でも、定着できるようにという取り組みがなされているわけなんですが、早速ここで本題に入りたいと思います。

まず、西村さんにお伺いしたいんですけれども、熱心に取り組んでいらっしゃる方がいる一方で、コウノトリがいなくても、何の生活は変わらないんじゃないかと。コウノトリは大切だというのはわかるけれども、「そこまでやらなくてもいいんじゃないか？」という声もないことはない。そこで、コウノトリが住める環境というのは、一体どういう意味があるのか、その辺からも一つお話をお伺いしたいと思います。

○　　パネリスト（西村いつき）

私も豊岡の出身なんですが、私が物心ついたときにはコウノトリはケージの中の鳥でした。その鳥を見ても何とも思いませんでしたし、もちろん生活していく上で何の不便も感じませんでした。多くの豊岡の市民の方が同じ思いではなかったかなと思います。

でも、この取り組みでは、私の恩師である神戸大学の名誉教授の保田先生の言葉なんですけど「環境が汚れたら食べ物が汚れる、食べ物が汚れたら体が汚れる、そして一番被害を受けるのは未来を担う子供たちである。」という、その精神が根底に流れています。

豊岡でも、コウノトリの野生復帰の取り組みを始めた当初、一部の方からも拒絶反応のような反応がありましたし、県や市が一生懸命力を入れている、この際だからこれに便乗して何か行政に要請、要望してやろうというような、そういう声もありましたし、コウノトリが野生復帰して僕らにどんな恩恵があるのかっていうような、そういうご質問もいっぱいございました。もちろん行政の姿勢としても、今でこそ一体になって頑張っていますけど、市と県とで担当が違ったりとか、コウノトリは県の鳥なので県がするのが当たり前だとか、面倒だしとか、管理が難しいとか、そういうふうな状況も当初からありました。

私、よくコウノトリ育む農法の関係で「大変でしたね。」とか「すごい取り組みですね。」とかって言われるんですけど、最初に私がした仕事は、農法のことではなくて、まずコウノトリの話を聞いてくださいと言っても誰も聞いてくださらないですし、集落が集まっていただこうと思ってもなかなか集まっていただけないので、女性、次の世代に命をはぐくむ女性にまず集まっていただいて、食の安心･安全というところからコウノトリの住める環境づくりについてまず女性に訴えました。でも、この仕事というのは組織の中でこういった合意が取れていませんでしたので、組織人としては失格だと思いますけど、まず何をしなきゃいけないか、まず自分の必要なことということで、本当にいろいろな地域に出向いて食の安心･安全という入り口からお話しして、その中で食の危機管理に重点を置いた話をしてきました。

あともう一つは、つくったお米、農家の方が一生懸命つくられたお米をとにかく主婦たちの方にしっかりと知っていただいて、買い支えていただかないと次の発展がないということで、買い支えるというふうなことを一生懸命お話ししておりました。

県民に特に訴えたいということで、次お願いします。

コウノトリからのメッセージ。皆さんがお米を食べれば、お米はたくさんつくれますよ、お米がたくさんつくれれば田んぼはよみがえりますよ、皆さんが安全なものを欲しがれば、田んぼで農薬を使わなくなりますよ、田んぼで農薬を使わなくなればコウノトリはよみがえりますよということを、女性の方、地域の方に訴えてきました。

もちろん、先ほどの水辺と生き物を守る農家と市民の会の皆さん方と同様、次の時代の子供たちにコウノトリ育む農法を教材にいろいろな環境学習を進めてまいりました。

子供たちは、お米をつくるというだけでなくて、実際に自分たちがつくったお米を販売してみて、一生懸命つくったお米が本当に努力に見合った単価で、苦労に見合った単価で売れないという現実を知り、米づくりや販売の中でいろんなことを学んで、地域のこと、農業のことを思ってくれるという人たちが出てきました。

私がいつも天のとき、地の利、人の和という話をするんですけど、今本当に分野を超えて地球環境のことを思うという天のときに来ていますし、豊岡は太古の昔から肥沃な農地がコウノトリをはぐくんできたという地の利があります。コウノトリが鳴らしてくれた警告というのは、今のままでは人類が危ないよ、考え方や暮らし方を見詰め直す必要があるよというのを、自身の体を犠牲にして私たちに教えてくれたんじゃないかなと思います。

多くの皆さんは、今いろんな形で支援をしてくださいます。その背景には未来の子供たちに安心･安全な環境を残してやりたいというしっかりとした大義があるから、いろんな方が教えに来て

くださるじゃないかと思います。白山にコウノトリがやってきた、それを皆さんは感動されたように、やっぱりコウノトリが安心をしてえさをついばむことのできる田園風景の意味を一人の多くの方と共有していけたらいいなと。天のとき、地の利、人の和ができたときに、初めて豊岡に生まれてよかった、ここに嫁いできてよかった、育ってよかったと思えるような、そういう地域になるんじゃないかなあというふうに思います。

今、全国から注目されていることということで、市長が説明されたと思うんですけど、環境と経済の融合だとかいろんなことが言われています。教科書に取り上げていただいて、来年小学校3年生と4年生の社会の教科書に取り上げていただきます。今、国内だけではなくて、海外からも視察の方が共同研究したいという方がいっぱいいらっしゃいます。豊岡は交通僻地でとても不便なところなんですけど、豊岡にいながらにして知の集積ができる、これも新たな地の利ではないかなというふうに思っています。

コウノトリは、本当に私たちにいろんな贈り物をしてくれる、そのことを多くの市民の方にご理解をいただけたとすれば、今の活動につながっているんじゃないかなというふうに思います。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

コウノトリっていうのは非常に自然の豊かさを象徴するものではありますが、それだけにとどまらないような大きい力を持っているということですが。

今年の8月ですね、福井県の知事と兵庫県知事が県内での放鳥、越前市なんかを想定したようなお話も出ておりますが、福井県でコウノトリを放鳥しようということの意義について、松村さんにお伺いをしたいんですけども。

○　　福井県安全環境部自然環境課（松村俊幸）

はい。福井県で、コウノトリを放鳥することの意義についてですけども、最初にですね、先ほどちょっと十分にお伝えしきれなかった、福井県の生物の現状があるので、そのことについてまずお話をさせていただきます。

先ほどヤンマのたそがれ飛翔の話がありましたけれども、もっと皆さんの身近なところでトンボ、このアカトンボが実は危機なんですね。このことをですね、石川県立大学の上田哲行先生がちょっと調べられた。

実はですね、1989年に89%の田んぼで発生していたアカトンボなんですけれども、80%にまで少なくなって、2007年、2008年に5%から4%に減少しているんです。先生がおっしゃるには、アカトンボも絶滅危惧種ということなんです。

その原因ということで先生が調べられましたところによると、特定の農薬がアカトンボを危機に導いた。いろんな化学農薬を知っているわけなんですが、残念ながらアカトンボに非常にきつい農薬が使われると言うことで、アカトンボが発生しなくなってしまった。これが全国的に起こってしまった。

それから、従前から言われていますのが、田んぼに乾田化でアカトンボの秋に水溜りに産卵することが出来なくなってしまった。特に一番多いのはアキアカネなんですが、これはですね、産卵するような水溜りのある田んぼがなくなってしまった。この地域では皆さんが農業をしているわけなんですけど、明らかに水たまりがいっぱいなんですけど、なかなか広がりのある水溜りのある田んぼが少ないということで非常にアカトンボが減っている。

こういう現実がありまして、農薬がですね、安全になりつつある中でこうやって特定のちっちゃい生き物に、やはり追い討ちをかける現実がある。

次は、マガンの話なんですけど、ガンというのはですね、田んぼにいるのだけじゃない。しかも、大型の鳥類でありなが生き残りました。コウノトリは絶滅したけれどもガンは冬に来るわけですね。農薬をまかない時期にやってきて、田んぼでえさをとるわけです。ですから、ガンはまだ生き残ったんです。福井県にはですねマガンっていう大型のガンなんですがそこに書いてありますように飛来しているんです。

これ70年前の分布です。50年前の、30年前のです。そして、現在はというふうにして、どんどん全国の飛来していたガンがいなくなっている。現在、福井県に残っているっていうことは福井県の宝なんだと。

そういった福井県の宝なんですが、ガンが一時期どんどん減少しまして、狩猟禁止をします。狩猟禁止をすることによってガンは個体数が増えました。つまりガンの個体数の減少は、農薬ではなくて狩猟です。ですから、狩猟の禁猟区をですね、どんどん増やすと、個体数が増加していた。

実はガンというのは沼地で夜を過ごしまして、朝そこを飛んで、日中に田んぼに行って、田んぼ餌を探すわけです。

福井県では、そういった生活の資質を持ったガンが鯖江で 1960 年から 70 年代に飛来した記録があります。

ところが、90年代に入ってきますとですね、もう鯖江ではいなくなりまして、福井市の一部地と坂井市に移りました。

2000年代になりますと、坂井氏周辺に集中的に飛来するようになった。

そして2009年には坂井市の一部に限られております。このころは基本的に石川県の田んぼというところ、飛来してきて、田んぼののなかでえさを食べるんですが、同じような行動をとっているんですが、ガンが、だんだん少なくなったんですね。

かつては、こういうのどかな田園風景だった。ここがですね、道路になるわけです。

道路が出来ると車が多く通る。そして警戒心の強いガンが居なくなった。

このように道路を通すことによって、ガンの生息地がどんどんどんどん狭められる。道の周りにコンビニが出来たり工場が建つということでですね、どんどん市街地になることでガンが少なくなる。

ここでですね、ガンがですね、いなくなったことを含めまして、こういったことをですね、一緒にですね、再生ということはですね、どんなふうにやるのかというのを考えてみます。非常に効果的だった事例をお話ししとくと、鯖江、かつてガンの生息地であった北鯖江では、冬期湛水をしたらハクチョウが来ました。このハクチョウが評判を呼びまして、日中ここの湛水水田で人が集まるようになりました。ハクチョウが飛来すると田んぼに余り訪れない若い女の人、それからあそこに幼稚園児、子供たち、にぎやかになりまして、おまけにですね、絶滅していたガンなんですけど、これ1羽だけですけど、ガンでございます。これは冬期湛水田っていう方法です。また、こういうふうに田んぼに溝を掘る。左下のほうになりますけども、滋賀県のほうにおいて水路そのもののですね、堰をつくってかさ上げをする。こういった取り組みを同時にすることによって非常に生きものが豊かになる。

これ冬期湛水水田の効果です。若狭町のほうです、夏場に湛水にしましたら、4羽も飛来した。それから、トンボが湛水水田に集まる。水張ると出てくるんです。

そしたらですね、かつてはですね、本当に自分のところにいろいろな鳥が来てなかったんですが、ここ何年間かですね、鳥類の飛来が非常にたくさんあちこちに、コウノトリ、それからコハクチョウ、それからガン、ツクシガモというカモ、こういったものがですね、どんどん確認されるようになりました。

要するに、かつて田んぼは、水鳥たちの休息場でえさ場であったんですけど、水鳥たちはそこへ行って順に移動しながら生活していたんで、それがあるときに切れてしまったわけです。そこに、水を張ってくれたということで見事に再生をいたしました。また、田んぼを使ったネットワークが徐々に構築されました。

こういったふうにして、非常に田んぼの整備体制によってですね、コウノトリだけじゃなくって、いろんな水鳥たちもまた生息するようになってきた。

左側はですね、私が子供のころに遊んだ遊び。いろんな遊びがあって、遊びの多様性があった。右側のほうはですね、実は私の息子に聞いたらね、あれくらいしか、遊びの種類がない。遊びが少なくなったことを痛切に感じました。ところがですね、子供たちがなんで遊びの回数が減ったんかなと思ったんです。

そこでですね、今、例えばですね、子供たちの活動ですと、田んぼで遊びながら生きものの増殖をですね、子供たちにやってもらう。こういったことが子供たちに必要じゃないかというに思うんです。

田んぼっていうのはどういうものか、子供たちにとって考えたんです。水辺の自然で遊ぶということは大変危ない、溜池で遊んで落ちたらおぼれ死ぬ、危ない。ところが田んぼでおぼれ死ぬ子供は殆どいません。ところが、田んぼの中にはですねいろんな生き物がいて、そして子供たちが遊ぶ場所だったんです。つまり田んぼの自然再生をするということはですね、子供たちも再生すると。で、子供たちの遊び場をつくってやれる、これは生涯、要するに子供たちが田んぼに関心を持って将来の担い手として子供なりになれる。

若狭町でみそみ小学校っていう学校ではですね、子供たちが自分たちで休耕田をですね、田んぼを作っています、そのときに子供たちが、「将来私たちが田んぼをやりたい」や、「田んぼをやって、米つくりかっこいい」そういうふうな発言がですね、子供たちの中からありました。ということは、子供たちにこういう経験をさせてあげる田んぼってすばらしい。これは物すごいことだと認識してもらうことで次の担い手ができるというに思う。こういった活動を通してですね、最終的に、今松島先生にコウノトリを育てて田んぼの自然再生を行う、すると子供たちが遊び場で、子供たちの遊びができると子供たちはそこからすばらしいことだと思います。将来ですね、大事なお米つくっていかなきゃって思うようになると思います。

○　　コーディネーター（山下裕己）

どうもありがとうございました。

さっきは、現在の状況はねっていうと、荒れている状況の中で、やはりこういう自然に目にかけるということになると、子供の遊びにもうまくなるというふうに変わってくるというお話でしたが、それではですね、ちょっと松島館長にお伺いしたいんですが、豊岡のコウノトリをですね、福井県越前市などでも放鳥するというのは、やはり動物学的にもですね、何らか意味合いというのはあるでしょうか。

○　　パネリスト（松島興治郎）

私たちが、この越前市からコウノトリが渡って豊岡に帰ってから、その年月の中に随分と大きな

考え方の転機がありました。コウノトリを越前に地に舞い戻るといいうのはこれから皆さんの努力によってこう始まるわけなんですけども、私が39年前に来ましたこの白山の地域の里の風景、今懐かしくまた見せていただきましたけど、本当に私たちが見ますと違和感のないこの風景の中で、私たちはかつて1羽のコウノトリが、育む様子が見なれた光景として私の脳裏にまだ焼きついております。そして、当時多くの地域の方々がコウノトリを温かく見守ってこられたという、その意味、コウノトリにまた来てくれるようにということを温かく迎えていただく呼びかけを今していただいているわけでございまして、当時も厳しい自然環境の中でコウノトリの体調を心配して、この地人たちがその対策を待ってられないということで、地元の方が集まって、コウノトリを呼ぼう、育てたいという思いの中で、確保して保護することをいろいろ話し合ったと聞いております。できることなら、そっと見守ってやりたいというような、そういった強い思いもあらわれたようですが、しかしそうな現状のままで県鳥としても１羽では飛び立ってしまうというようなところも考えられるし、また田植えのシーズンを迎えるに当たって、またその中で本当にされてというのも非常に心配だなということに加えて、1羽だけでは繁殖の可能性もないが、どっかでコウノトリをしっかりと保護して、また豊岡のほうではこういった保護活動をやっていく人がある、そうしたところに来るのも一つの方法であるのではないかというような議論がなされた結果、豊岡に移されたわけでございますんで、もうここは福井県の教育委員会から兵庫県の教育委員会を通じて地元にその意向が伝えられました。飼育を受けるについては、非常に重いものを感じたわけでございますが、そのころは、当時飼育と管理の活動をしておりましたが、私たち但馬コウノトリ保存会のメンバーの中で、今でもしかるべき時が来たらコウノトリのこの心、豊岡の地にコウノトリがふ化させるように、福井県越前市にもお返ししなければならないという、もうそんな思いを受けている人たちがいるわけでございます。

その中で、コウノトリの保存区域、こういったものがかつての福井県の中でも見られておったようでございます。こういった光景、何げない風景の中に、日常の風景の中にコウノトリがいるという、こういったものがやがてつくられるような環境づくりを皆さん目指しておられるわけです。ましてや、このコウノトリというものは、これから先、長く国内の中でこう続けていくためには、やはり限られた地域だけ、今豊岡でようやく試験放鳥をして、その育成について今一生懸命頑張っているわけでございます。できるだけたくさんの場所にそういったものを広げていきたいというのが私たちの思いでございます。是非、この越前の地にまずこのコウノトリのコウちゃんが選んだこの地に、こういったものをまず始めていくのが最善だろうというふうに私たちも思っております。

福井県までやってきたコウノトリ、3カ月ほどの滞在だった地でございます。そういった意味でも、

そしてまたこれからのまさかが起きるかもしれないこのご時世の中で、少し豊岡から離れたこの越前の地にしっかりと根づいた、こういったコウノトリたちがいるというのは非常に大事なことだろ私たちも思っております。是非この地にこのコウノトリが、自然の中で日常の風景の中でどなたでも見られる、特別の鳥というのでない状況になる、そんなものを今皆さんの中で一生懸命頑張っていただくわけでございます。 豊岡の試験的放鳥の写真を見ていただいておりますが、少しずつ私たちの地方でもこういったものが見られるというのを皆さんに紹介しながら、是非この地にこういった時期が再度訪れることを私は一生懸命仕掛けをしてきたいなというふうに思っております。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

豊岡のほうからですね、是非もう一度武生のふるさとであるこの越前市に、返さなくちゃいけないという思いをお聞きしましたが。

それじゃあ次、菊地さんにお話ししていただきたいんですが、いろんな取り組みの中でですね、そういう取り組みがいきなりですね、ぱっと広がったわけじゃなくて、いろんな地道なことを積み重ねられたと思うんですが、そういうふうな市民の意識の変化とかですね、それとかそれに伴う効果といいましょうか、そういうものについてちょっとお聞きしたいんですが。

○　　パネリスト（菊地直樹）

私が、先ほどもご紹介をさせていただきましたが、8年前からコウノトリの野生復帰プロジェクトをしてまいりました。コウノトリについてお年寄りの方から放鳥の話を聞きました。で、そのときまだ放鳥前ということもありまして、やっぱり害鳥なんだとか、そういうもっと複雑な思いというかですね、やはり生き物でともに居る存在でも、やっぱり害鳥であるそういうような意識を持たれてる方がおられたということだったんです。

それでですね、時間も余りありませんから、簡単にお話しさせていただきますが、 要は自然再生ということを一緒になって取組みことがコウノトリの野生復帰に大事なんではないかなと思います。

そういう意味でですね、先ほど西村さんがおっしゃってられましたけど、コウノトリ育む農法をしているところと、363と言うコウノトリがどういうところでえさをとっているかというところかと言うのを示したものですけれども。これを見るとかなりですね、一致しているということは、コウノトリを育む農法を意識して飛来しているとも言えるんじゃないかと思います。ただ、これはもう少しですね、研究をいろいろと重ねないとはっきりしないこと思います。

あと、中貝市長がお話しされました経済効果なんですけど、実は私たちもやっていただくこともできるんですね。それは、豊岡市で行くだけでも、1人当たり大体1万5，000円ぐらいからです。これは、野生復帰の経済的価値を可視化しようとすると、こういうことをすることによって別の経済的価値を出てくる。

それは、先ほど中貝市長のお話にありましたけども、およそ10億円のですね、経済的効果があるわけですけれども、実はほかの意見も、もっとおもしろい意見がたくさんありまして、例えば、ほぼ100％の方が豊岡でとても楽しかった、おいしかったと 回答されていて、つまんなかった人は一人も居ない。また豊岡に来たいと回答している。こういうことから、やっぱりコウノトリがいる風景が非常に高く評価されていて、でもそこを支えているのは、この写真にあるように、農業者であるとか、あるいはこういう山をきれいにするかとか川をきれいにするとかこういうさまざまな団体が居るわけでございます。そういうものがあるんですね。エコ農家の人たちとかがですね、たくさん来ましたけども、それをすることによってですね、いろんな生き物の文化、生き物文化なんですけれども、生き物のことを考えられている方がたくさん出てきているということがわかってきます。田んぼの生き物だけじゃなくってですね、こういう農法を変えることによっていろんな生き物が増えました、はい。そういうことで思っていって、それはやっぱり非常にすごいことだと思います。一方で、課題としては農業を引き継いでもらいたい人は、担い手がなかなかいないということですね。

最後にですね、これはある地区で行ったアンケートなんですけども、コウノトリが近くで舞っているようになって、どういう風に変わったかというのを聞いてみた。これはですね、その中で一番生態系が回復しているというふうに思うと、コウノトリというのはかつて害鳥で共生は難しいと思っていた人が非常に多かったのですね。かなりそれ以外の価値として、生態系とか、いろんな活動を続けてきている方が出てきています。

以上です。

○　　コーディネーター（山下裕己）

どうもありがとうございました。

それでは、実際にですね、コウノトリが舞う里づくりに向けて実際自分たちで活動していらっしゃる堀江さんにお伺いしたいんですが、そういう意味では、里山の生態を守るいろんな活動をされているわけですが、地元取り組みとしての思いとですね、今後の課題についてちょっとお話しいただけますでしょうか。

○　　水辺と生き物を守る農家と市民の会会長（堀江照夫）

私どもの水辺の会の先ほどの説明をさせていただきましたように、その理念ていうのは5つありまして、特に未来につなぐとうようなにとってはですね、やはり未来ということを考えたとき、水とかね、やっぱり土、そういうものが汚れてきているんですよね。そういうふうな形に対してね、私たち責任を持っているんです。

もともと田んぼっていうのは、山を耕したりあるいは開墾したり、そういうとこからたどり着いてきたんですね。その田んぼが、昔は自然のままで田んぼをつくり、そこに生き物がどんどんとはぐくんできたと。そこに今度は生き物、鳥とかそういうものが増えまして、人間との共生社会ができたという形になるんですけども、そういう汚れてきたといいますか、ものをですね、もとの姿に変えていかにゃいかんというふうな形で私らは取り組んでいるつもりおります。

したがいまして、やはりそういう、川で遊んでも水を飲んでも何ともないとかというふうなそういう環境をつくるためにですね、今ではもう既に地下水そのものも火にあぶらにゃいかんというふうなそういう言葉も聞こえてきますので、是非ともですね、コウノトリの手法として、こっちはコウノトリが早くこの私どもの地に舞い戻ってきているような、そういう体制をとりたいなというふうに思っておりますけども、それ基本的にはそういうコウノトリが来ても生き物を育むそういう社会をつくっていかにゃいかんなというふうに考えております。

いわゆる慣行農法と有機農法、この辺の農法についてもですね、もっと勉強し、またそういう問題をみんなで一緒に共有しながらね、そしてそれを一つ一つ、先ほど中貝市長の話にもありましたけれども、一つずつをクリアしながら地域としては進めていく必要があるなあというふうに考えております。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

さっきも言いましたようにですね、こうお話をお伺いしてですね、コウノトリが里づくりというその雰囲気をですね、そしていろんな答えもあったということです。

さらに、コウちゃんをきっかけとした豊岡と越前の近年のきずなというんでしょうか、そういうお話も紹介されたと言えます。

それでですね、それではこの白山、坂口地区にコウノトリが定着するためにですね、そういう里地里山づくりのために、そのためにどうするのか、地域は何をすべきか、農業関係の方はどうすべきか、消費者はどうすべきか、そういう一人ひとりに何ができるのかということについてパネリストの方々に一言アドバイスをお伺いしたいと思います。

まず、松村さん、助言をお願いいたします。

○福井県安全環境部自然環境課（松村俊幸）

県のほうではですね、実はこういった活動を通してですね、できるだけ皆さん方に、県民の多くの方に自然再生を実施していただいて、そして生き物を呼び戻すそうですけども、誰でもどこでも自然再生行動プロジェクトと言って、町の方でもですね、里山でも皆さん方が出来る自然再生をこんなことをすれば、生き物を呼び戻せますよと言う活動を、子供たちの遊び場をつくることにより、先ほど申し上げたことを県民運動としていって啓発していきたい。

これを見ていただきますと、市民に自然再生ガイドブックとして、自然再生をしていろいろ手法をまとめて冊子をつくりました。それからですね、自然再生行動プロジェクト、やりましたと言う場所にプレートをつくって、プレートがつくりました。子供たちの教育のために、子供たちにクリアファイルをつくりました。実は、この活動もですね、やはりきちっとした一つの方針のもとでやらせていただく。なぜかというと、実は生き物のことは好きなんだけど、自然のことは好きなんだけど、自然をつくるというのをいろんなことをしたいんだけど、少しですね、専門的な知識がですね、足りないためにどうしても違った方向に行ってしまうことがあります。そこでですね、きちっとした方向性を一本定めてですね、それをですね、サポートする自然再生支援隊、専門家の方々がサポートするというチームづくり、そういった方々がですね、最初の段階から生き物を調べる、そしてそれを整える、どうしようと考える、こんな自然再生の図式をまたまとめましてですね、それを実際に行動する。で、またそれで、県の下で、そうですね、本当に余裕がなくなるそれをどんどんと繰り返す。というようなことをですね、一連の行動を自然再生していくというそれぞれの活動を専門家の方にサポートすることで、できるだけ間違った方向に行かないように、正しい方向にですね、導いていってですね、活動をですね、継続してくれるようなるっていうことに取り組んでいます。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

それではですね、菊地さんのほうにですねどういうことに取り組んでいただきたいかちょっとお聞きします。

○パネリスト（菊地直樹）

先週もですね、豊岡で話になったときにもその中で、やっぱりコウノトリというのは、いろんな形で聞いてきましたけども、私たちがやってきたのはですね、地元を作ることを一つの取り組みとしてやったんですね。それでですね、今日は私のほう断片的なところもありましたが、そんなことの中

でも経済効果とかもいろいろな形で出てきている。それプラスですね、社会ネットワークというか、さまざまな活動が出てきています。市民がいろんな調査をし、こつくり上げていく。教育とか、また市民が違うひとたちとそういうふうにコミュニケーションする。最後なんですけども、例えばこれ越前でもそうですし、愛媛県の西予市でもなんですけども、コウノトリが飛んでくると物すごく皆さんものすごく活動が生まれてくると、これはハッピーなことなんですけど、いつも考させられるんです。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

それではですね、西村さんにですね、地域の応援とかですね、そういう地域の共有意識づくりという、そういうところについて何かお話があればお願いしたいと思います。

○パネリスト（西村いつき）

コウノトリ育む農法、生物多様性という意味で、すごく注目をされています。当初、多くの皆さんが、お米が高く売れるからというので育む農法を。もう一つに、お米が高く売れるからというのでことで育む農法の取り組みされるという例が多いんですけど、育む農法をしていくうちに、いろんな方と田んぼで学んだり、また生き物から学んだりしていくうちに、自然の節理の中からやっぱり命への共感というところの性格。多くの農家の方が、僕はな、西村さん、田んぼで育む農法を知るまでは、田んぼで草刈り機で草を刈っていて、カエルを切っても蛇を切ってもちぇっとかと思ったし、家でゴキブリを見ても、ゴキブリをつぶして殺して歩いていた。育む農法をするようになって、自分も生かされているんだっていうことを知って、今は蛇を切ったりカエルを切ったら思わず手を合わせるし、家の中にゴキブリを見つけても早う行けよっていうふうに言うようになったんだ。人も随分変わるもんだなあっていう話をしてくださいます。私は、そんな小さな命までも大切に思う、そういう心を持った生産者のつくった農産物を多くの皆さんに食べていただきたいと思いますし、そういう人がつくった農産物だから、皆さんが買い支えることをされるのかな、支援をしてくださるのかなというふうに思います。

今、豊岡の農家の皆さんは、少しずつ、お米が高く売れるからっていう意味ではなくて、お米の値段が下がったって僕は育む農法をするでという方が多いんです。育む農法が、何かコウノトリにはそんな人の気持ちを変える力があるんじゃないかなというふうに思います。

次、お願いいたします。

この取り組みをした当初は、前例のないことだとか、やっぱり職域を外れたことだとかっていうことに対してなかなか取り組みが難しかったです。私も公務員ですので、公務員で何かやりにくい

こととというのがありましたけど、でも住民の皆さんの支援があればできることっていうのもいっぱいありました。私、橋本左内さんの福井県出身の、すごく尊敬しているんですけど、15歳にして志を持つということの大切さを広めた方ですけど、皆さん心の中にありますように、考えるよりも先にまず行動すること、自分ができること、あとできる人が、いっぱい人もいますし、私は私欲のないものが必ず勝つと思います。思い続けること。コウノトリの住める環境絶対つくるんだという、そういう強い思いが必要だと思います。

あと、経験が一つにだけっていうことで、やはり育む農法をしてみたいと言われるので、自然の先生が田んぼの環境を与えてくれます。いろんな失敗も必ず大きい糧になってくれると思います。

あと、志が同じくする仲間をつくる。不思議とコウノトリはいろんな人の縁を結んでくれます。コウノトリ対して日本の皆さんが一生懸命になられればなられるほど、仲間がもっと増えていくと思います。しかしまた、追い風がないとなかなかつらいところはあります。志の高い思いが必要だと思います。

民意を創造するという意味で、私はやっぱり正しい情報が必要だっていうふうに思っています。夫婦なんかでも、愛しているよという言葉を言わないとお互いの気持ちはわからないように、やっぱり伝える努力をしないと、ここの地域もすばらしいというふうになって、多くの皆さんにご理解いただけないと思います。戦略的な情報伝達っていうのはすごく大事だから、そういう意味で福井県越前市さんは恵まれていると思います。福井新聞やＮＨＫの福井放送局さんがすごくバックアップされております。これはかけがえのない皆さんの財産ですので、是非大事にこれからも末永くいろんなマスコミの方がご支援していただかれたらいいんじゃないかなと思っています。もちろん豊岡は、兵庫県というよりも、地元の新聞社やテレビ局の方に大変お世話になりました。大変な努力をこれはもっともっとしていかないといけないなと思います。

育む農法をするときに、皆さんにお願いをしてきたことが2つあります。1つは、知恵のある人は知恵を出してください、力のある人は力を出してください、お金のある人はお金を出してください、何もない人は足を引っ張ることをしないでくださいというお願いをしてきました。多分、これは皆さんの地域でも通じることではないかなと思います。あとお願いとして、豊岡は弁当忘れても傘忘れるなっていうぐらいとてもよく雨が降ります。私も豊岡の出身なんですけど、豊岡の人はできない理由を並べさせたら天下一品だと思います。それでも、できない理由を並べるんじゃなくて、まず一歩を踏み出してください。兵庫県はそのお手伝いを力いっぱいさせていただきますということを地域の皆さんにお約束をして進めてまいりました。今、お伺いをしておりますのは福

井県さん、もちろん越前市さん、行政を挙げて市民の皆さんのご支援をするというふうなことで、一生懸命活動をしていらっしゃいます。皆さん、安心をして頑張っていただきたいなっていうふうに思います。

私は、普及指導員をしていまして、何もない地域にも必ず地域を救う地域資源があると思ってやってまいりました。

当初、コウノトリの活動を始めたころ、豊岡の皆さんに、コウノトリは地域を救う地域資源じゃないですかというお話をよくしました。でも、その反応はとても冷ややかでした。でも、今多くの豊岡市民の方が、兵庫県民の方が、コウノトリは豊岡を救う地域資源じゃないかなというふうに思ってくださっていると思います。コウノトリは、日本の文化や健康の源である田んぼの大切さを私たちに教えてくれましたし、未来を担う子供たちに豊かな環境を残してやりたい、伝承していきたいという、そういう強い思いを持たせてくれました。コウノトリはとっても不思議な力があります。本当に、皆さんにかけがえのない贈り物を必ずしてくれると思います。

いろいろな話の中で、宝塚の毬穂えりなさんの歌が流れてきました。彼女も豊岡の米づくりで兵庫県のために活動を通して自身ができることをしたいということで、豊岡の市内の小学校や保育園を慰問で回って、あなたの地域はとってもすてきな地域ですよ、頑張ってくださいねっていうふうなメッセージを下さっています。ここの白山地域や姫路の皆さんの取り組みを、全国の方、また全世界の方が応援してくださると思います。是非是非引き続き頑張っていただきたいと思います。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

じゃあ、ちょっと時間も押してきましたので、それではですね、先ほど堀江会長や松島さんがですね、堀江さんには、現状と、そして松島さんにはですね、白山・坂口地区に対するエールほうをひとつお願いいたします。

○　　水辺と生き物を守る農家と市民の会会長（堀江照夫）

先ほどからいろんなお話を聞いておりまして、コウノトリが、先ほども申しましたけども、舞いおりたところはですね、非常に元気になっていく、そういういわれがあるようでございます。

そういうことで、この越前市、そしてまたさらにこの西部地域にですね、コウノトリが一日でも早く舞いおりてくるような、そういう活動を展開していきたいというふうに考えております。コウノトリが舞いおりる地域というのは、笑いが、そして人と人の集いが、また地区外の方との交流が、そんな大きな成果も出るというなことも言われております。

そういうこともありまして、これからですね、今日のいろんな情報をいただいたことをですね、我々がまたそれを共有して、これ白山、坂口にはコウノトリ呼び戻す農法部会というのがございます。そういう部会と協力しながら前へ前へ一歩一歩を進めていきたいと思いますので、またひとつご協力、ご支援をよろしくお願いいたします。

○　　コーディネーター（山下裕己）

それでは、松島館長からもひとつお願いいたします。

○　　パネリスト（松島興治郎）

最後になりました。

皆さん、本当に今日はお疲れさんでございました。

コウノトリの取り巻く環境というのは決して易しいものじゃございません。しかし、皆さんのように、かつての私たちのほうとふるさとの原風景を取り戻しながら、自分たちの新しい文化をこれからつくっていこうとされるこの力強い、そういったものを感じさせていただきました。パネラーの方のすばらしい提言、意見、そんなものも踏まえて、これから先も前進していくことを申しまして、また私たち郷公園では本当にもう試験放鳥などを踏まえまして、コウノトリの経済効果等々の多くのデータが今蓄積されつつあります。お互いがまた私たち努力によって多くの同志の人たちとこの情報を交換し、共有しつつ、明日の米づくりのために生かしていけば、必ずや本物のふるさとの再生は日本を救うものと聞いております。

今日はお招きいただきまして、非常に私たちも意を強くして帰ることができます。これから、一緒に手を携えてやっていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○　　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

時間も押してしまいましたけども、今最後にですね、一言だけ申し上げたいと思います。

コウノトリの明日私たちができる育む農法というのは、非常に多様な意味合いがあるということですが、今私自身が思うのは、白山、坂口地区というのはですね、今その最大のチャンスだということだと思います。私自身は、越前市白山出身だといっても、知らない人が結構いたんですけど、今ではほとんどの方が、ああ、コウノトリの来る支局の白山かというふうに言われるようになっています。そういうときはですね、やはりこういう機会をつくっていくのが大切であるなというのが言えると思います。いろいろ問題、対策改善など課題はたくさんあると思いますが、その課題を見つけ、分析するために時間を費やすには、今の機会を見逃しちゃいけないというような気が

いたします。

そういう意味で、せっかく共有、こういうシンポジウムをした中でですね、皆さんが感じたことをですね、一つずつ実践のほうにまず行動を起こしていただくということにしただければ幸いだと思います。

今日はちょっと時間も来てしまいましたが、長々とシンポジウムをお聞きいただきまして、まことにありがとうございました。

屋内展示物

コウノトリ唐子の剥製

コウノトリバードカービング

交流懇親会

交流懇親会で挨拶をする加藤信之しらやま振興会会長

交流懇親会では地元の料理が振舞われた

参加者全員で踊るしらやま音頭

<パネルディスカッション第２部>

「環境調和型農業推進パネルディスカッション」

テーマ　　【生きものを育む田んぼ】

11月7日（日）９：３０～１０：３０

■ パネリスト

西村いつき　氏（兵庫県農政環境部農林水産局農業改良課　環境創造型農業専門員）

（前掲）

田中英典　氏　（福井県農林水産部食の安全安心課　生産環境グループ主任）

南越前町在住。1983 に福井県庁入庁。

現在、2009 年 3 月策定の『ふくいのエコ農業推進計画』に基づき、エコ農業の推進に取り組む。

恒本　明勇　氏（コウノトリ呼び戻す農法部会会長）

１９４７年生まれ。越前市在住。

昭和 56 年からしらやま西瓜や水稲を中心として農業経営を始める。

田んぼはお米作りと同時に生き物を育むところと位置づけ、豊岡市で「コ

ウノトリを育む農法」を学び、田んぼ仲間と共に平成２１年「コウノトリ呼び戻す農法部会」を立ち上げ、発足と同時に会長に就任。無農薬、無化学肥料栽培を始め、「生きものを育む農法」に目覚め、今日に至る。

■　コーディネーター

山下　裕己　氏（福井新聞社論説主幹）

（前掲）

【パネルディスカッション内容】

テーマ　【生きものを育む田んぼ】
コーディネーター：福井新聞社論説主幹　山下裕己　氏

地元の白山地区でコウノトリ呼び戻す農法に取り組んでいらっしゃいます恒本明勇さんです。

○パネリスト（恒本明勇）　恒本です。よろしくお願いします。

（拍手）

○コーディネーター（山下裕己）　では、早速今日ですね、シンポジウムに入りたいと思うんですが、昨日のですね、１日目のシンポジウムの中で、コウノトリが住む環境というのはですね、ただ単に自然が豊かというだけではなくて、そこに住む人たちの気持ちも豊かにしてくれるし、地域の活性化にもつながっていく。そして、その里山を守っていくということは、さらにそれをもう一度復元するといいましょうか、維持していくということが、生物の多様性にとっても重要である。さらには、子供の教育とかそういう幅広い意義があるというお話がされました。

そしてさらにですね、昨日は兵庫県豊岡市のほうからもですね、いろんな方が来ていらっしゃって、越前市と豊岡との深いきずなというのを再認識したという、そういった認識があったと言えます。

そして、今一般の方からもお話がありましたけども、今日はその中でですね、やはりコウノトリの舞う里づくりという中で一つのキーワードになる環境調和型農業、これについてテーマを絞って議論をしたいと思います。

早速なんですが、まず一番最初にですね、コウノトリ呼び戻す農法というのを、ここ白山

で盛んにこれを取り組んでいるわけですが、今年ですね、異常気象で夏は毎日猛暑日で、もう非常に歴史的な猛暑日を記録したというところがありますので、今年の作況についてですね、ちょっと恒本さんにと兵庫県の豊岡はどうなのかということをちょっとお伺いしたいと思います。

じゃあ、恒本さん、まずお願いいたします。

○パネリスト（恒本明勇）　私、コウノトリ呼び戻す農法部会の部会長ということでお世話させていただいております恒本でございます。こうした場所で発表するような器でございません。不手際もあるかと思いますが、どうかお許しいただきたいと思います。

今、山下さんほうから今年の作柄はどうかというふうなことでございます。

私どもの周辺の農家の人のお話を聞きますと、大変夏は暑かった、農作物に対して非常に影響があるんじゃないかと非常に懸念をされていたわけですが、お聞きするところによりますと、そんなに大きな減収はなかったよというふうなことも聞いておりますし、品質面でも非常に福井県全体でも、またはＪＡ越前たけふ管内でも落ちているというふうな聞きますが、私どもの周辺での仲間のお話を聞くと、そんなに大きな減収はなかった、また品質の低下もなかったというようなことを聞いておりまして、非常に喜んでおるところでございます。

私どもの取り組んだ無農薬、無化学肥料におきましては、どういうわけか、昨年と比較しまして減収というような形になりまして、何が問題だったのか、これからいろいろメンバーと一緒に課題を追求していき、改善に向かっていくというような状況にございます。

○コーディネーター（山下裕己）　そういう意味でね、昨日たしか西村さんがシンポジウムの中で無農薬、無化学肥料、コウノトリが育む農法ですか、のところで、ある程度こういう気候変動には強いというお話をされておりましたけども、それでは豊岡とか兵庫県の状況をちょっと、西村さんお話しいただけますでしょうか。

○パネリスト（西村いつき）　昨日も見ていただいたんですが、コウノトリ育む農法というのは本当に気象状況に左右されにくい、これが一つポイントになってこようかと思います。兵庫県では、試験研究が中心になりまして、コウノトリプロジェクトチームというチームを組んでいまして、３年ぐらい前から慣行農法と減農薬堆肥、これは肥料は有機肥料なんですけど、あと無農薬の分と、１株調査というのをしております。その結果を見ていただいたらわかるように、収量的には、例えば慣行農法の場合はいい年、悪い年の変動の幅が広いんですけど、無農薬の場合は割と気象変動に左右されないという特徴があります。ただ、どうしても深水管理というのをしますので個数がとれにくい。個数確保のためにはまずいい苗をつ

くる、活着をよくする、きちっと草を抑えるっていうような、そういうポイントをしっかり押さえていただけたら、気象に左右されずに収穫がまずまずとれるというのがポイントになっています。

育む農法の場合も、年々課題は変化をしています。当初始めたころは、今ではもう考えられないんですけど、いもち病ですとか、イネミズゾウムシですとか、そういう病害虫に苦労いたしました。最近では、抑草の関係とか食味の関係とかに取り組んでいます。県民局の中でコウノトリプロジェクトチームという普及センターや農林事務所や土地改良、地方機関が中心になったプロジェクトチームを組んで、平成１６年から、県だけではなくて、市やＪＡも一緒になった実務者会議を組んで、平成１８年から試験研究にも入っていただいて、試験研究が中心になってこのコウノトリプロジェクトチームという形で取り組んでいただいておりまして、やっぱり年々変化する課題に対応をしてきています。これは、自然農法センターの早川さんの資料なんですけど、土の肥沃度によって出てくる草が違ってきます。豊岡の場合も、当初ヒエに困っていたのが、抜くたびに困るようになり、コナギに困るようになる、今はクログワイに困っています。多分越前の皆さんも同じような経過をたどられていると思いますし、２０年、３０年、この地でずっと農業を頑張ってらっしゃる方は、ああ、わかるわかるっていうふうにご理解いただけるんではないかなと思います。

やっぱり何よりも敵を知る。抑草に困られる方っていうのは、結構草の性格とかそういうことを知らずに、やみくもに困った困ったって言ってらっしゃるような気がします。やっぱりずっと機能的なことをマスターされて、適切な対応をする必要があるんじゃないかなというふうに思っています。

兵庫県でも、そうはいいながら、やっぱりそれも抑草に困っていまして、ひょうご安心ブランドモデル産地育成事業という事業を使って抑草対策というのをしています。特に機械除草の技術なんかを確立したいというふうなこともありまして、ちょっとこれ見ていただけますでしょうか、小型のアイガモロボットを、田んぼの中にこれを１台入れといたら、勝手に機械が草を取ってくれるっていうような、これは産学官のクボタさんだとか、三菱さんだとかというメーカーさんと、兵庫県と、兵庫県立大学と連携をして、地域で試験研究をしてるところです。一個一個どんな機械か……。

映像が流れて。

田んぼの中を本当に勝手に走ってくれて、草を退治してくれるんですが、これも機械を使いこなす行使的な技術との組み合わせが必要ということで、今その技術確立のために試験研

究を一緒に取り組んでいるところです。

　済いません、ちょっと映像が映らなくて申しわけないです。

○コーディネーター（山下裕己）　じゃあ、先ほどね、ちょっと写真の中ではありましたけども、今そういう研究開発をしているということですが、何かちょっと事前のお話の中で、やはり無農薬農業の場合は足し算とか引き算じゃなくて、掛け算みたいな性格があって、やっぱり幾つかの要素のうち何か一つが悪ければ収量がぐんと落ちるというようなお話をされていましたけど、そこのとこをもうちょっと説明していただけますか。

○パネリスト（西村いつき）　育む農法のパンフレットをお配りしていると思うんですけど、この農法の組み立ての中では幾つかの要素があります。先ほどもずっとお話ししましたように、この農法の場合は倒伏ぐあいっていうのは、もう本当にね、変わりません。何がポイントになるかといいますと、お米の収量のポイントの要素の中で敵の数、手数をどれだけしっかりとるかというのがもうポイントになるんじゃないかなと思うんですけど、敵の数を取るためには、まずいいものをつくらないといけない。育む農法の場合は、これプラス生き物を育てるということがあって、耕起湛水ですとか、冬季湛水とか、ですとか、そういうこと、今までとは違う技術を入れて、それがすべて抑草に関係してくるんですけど、その中のどれか一つでもしっかりと基本を抑えていただいてしていただかないと、ゼロになってしまうと草の対処ができなかったり、この数が確保できなかったりして、足し算のようになって、掛け算の農法なので、どれ一つとして決まってないということでして、有機農業というと、多くの方が昔に戻るような感覚を持ってらっしゃるんですけど、決してそうではなくて、先ほど雑草の発芽適温だとか発生の条件だとかの表をお見せしましたように、それぞれ雑草だとか病気だとかの生理生態をしっかりと踏まえた上で、科学的な根拠に基づいて技術を組み立ててますので、それのうちどれか一つでも狂ってしまうと、うまく収量のところまでたどり着いていかないという、すごくデリケートなところですね。

○コーディネーター（山下裕己）　ありがとうございました。

　今年ですね、少しちょっとそういう気象の関係もあって、量というそのものは少し収量が落ちたということですが、今の西村さんのお話をお聞きすると、そういう原因とかですね、あって、どこも調べていけばそれほど収量が不安定になるものではないというお話だったんですが、それで実際にですね、恒本さんはここでその農法に取り組んでいるわけなんですが、それを始めたですね、その部会を立ち上げた経緯とかですね、その思いをちょっとお話ししていただけますでしょうか。

○パネリスト（恒本明勇）　はい。

私どものコウノトリ呼び戻す農法部会を立ち上げた経緯といいますか、まだまだ始めて丸２年でございます。非常にまだまだ未熟な存在でございまして、試行錯誤しながら取り組んでいるということでございます。

白山地区は、以前から非常に環境保全に対しまして関心の高い地域だと私は思っておりました。絶滅危惧種のアベサンショウウオを初め、ハッチョウトンボ等々、非常に貴重な生物が生息する環境ということで、またコウノトリに対する熱い思いもたくさんの人が持っておられますし、こうした中、思い起こすに平成１９年度からだったと思うんですが、農地・水・環境保全向上対策事業というなのが国の事業で始まってきておりました。地域内におきましても、環境に対する思いが日に日にこの事業によって高まってきたようにも思っています。

こうした中、福井県またＪＡ越前たけふを中心とし、環境保全型農業の推進というふうなことで、大変お骨をお折りいただいて、いろんな講習会、勉強会を開催してきたようでございます。

そういうふうな流れを受けまして、私ども今日お越しの豊岡の西村さんの話を聞く機会がございまして、そのときにコウノトリに対する思い、またそれらにコウノトリから受ける、人も地域も元気になるというようなお話を聞いて非常に感銘を受けまして、私どももこうした取り組みができないかというふうなことで、有志６名ほどが集まりまして、それじゃあ一度遊び心でもいいから取り組んでみようというなことで取り組んでまいりました。正式に、昨年の１月ですが、８名の方で無農薬、無化学肥料、これを取り組んでみようというふうなことになりまして、８名で２．３ヘクタールの面積に取り組んでまいりました。結果はさんざんなものであったんですが、それでも生き物と共存する田んぼ、田んぼは米づくりの場じゃなくして生き物もはぐくむ場所であるというような思いを持ち、頑張ってまいりまして、今年、平成２２年度は１５名の方が５．６ヘクタールで取り組んでまいりました。本当に雑草との闘いといいますか、収量も非常に低くて、今ちょっと見ていただいていますが、実は今年度収量というふうなグラフをつけました。今年１５名で５．６ヘクタールを取り組んだここの１０アール当たりの反収が下のほうにＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、アルファベットが生産者、そしてその下が１０アール当たりの反収っていうなことで並べておきまして、グラフが出ました。これ見ますと、多い方で６俵、少ない方では３．５から４俵というふうなことで、通常ですと、慣行栽培ですと、マニュアルどおりやっておれば８俵、９俵確保できるんですが、私どものこの取り組みですと、こうした実態がございまして、大変厳しいといいますか、半

分の収量というな現実でございます。ここらを打開するために、いろいろこれから勉強しながら、いろいろな課題に挑戦していきたいと思っているところでございます。

○コーディネーター（山下裕己）　ありがとうございました。

まあね、そういう意味では今年はちょっと残念な結果で、これからいろいろと改良、改善をしていかなきゃいけないところもあると思うんですが、西村さんにちょっとお伺いしたいんですが、まあね、昨日のお話でもありましたけども、そういう収量をいかに確保するかということもあるかと思いますが、それ以外の育む農法のいいとこもたくさんご紹介いただきましたけども、そういう意味での育む農法のですね、豊岡の現状とかですね、その意義、それをさらに広めていくようなですね、方法、課題なんかありましたらちょっとお話しいただけますでしょうか。

○パネリスト（西村いつき）　育む農法、昨日ちょっと収益性っていうようなお話をさせていただいたと思うんですけど、慣行栽培の場合、キロ２００円、今年はもっと下がっていると思います。豊岡で慣行栽培、３０キロ５，０００円、農協さんの買い取り単価が、生産をしてもそんなに多くはならないと思います。育む農法の場合は、今年ちょっと４００円ほど農協さんは下げられたんですけど、キロ３６０円で、農家の方がご自分で販売されたらこの倍の単価になります。今、豊岡では、お米だけではなくて、輪作体系の中で大豆もやっておりまして、大豆も育む大豆ということで、キロ３６０円、これはもう等級関係なしに買っていただいています。

やっぱりこの背景の中には、例えば豊岡の場合、農薬栽培でも最低６俵、できたら８俵ぐらいとりたいな、そうはいってもまあ７俵とれたらいいな、そうなりますと大体ざっと単純計算して１４万から１５万の収益になります。慣行栽培で１０俵とっても、５，０００円だったら１０万円です。育む農法の場合は経費がかかりませんし、たくさんとればとるほど、後のお米をたくさん使わないといけないですし、乾燥調整の手間がかかるし、ちょっといいものをとって高く売れるほうがずっと農家は楽じゃないかっていうようなことが言われます。１０ヘクタール、２０ヘクタールでもうつくっていらっしゃる農家の方は、今まで農薬代、化学肥料代を含めると２００万から３００万の現金の支出だったけど、それがない分すごく楽だっていうようなことをおっしゃっています。口コミで広がっているというところもあります。ただ、最低それでも６俵、７俵はとりたいねというようなことで頑張っていただいているんですが、やはりそこでは再生産可能な価格の決定というのはすごく大事な要素になってこようと思います。

そういう意味で、越前市はＪＡさんをしっかりと応援してくださって、価格的なところの心配はないんだよというふうなお話を伺って、うらやましいなあっていうふうに思っています。

今、豊岡で抑草の関係では、まず無農薬タイプと減農薬タイプがあるんですけど、減農薬タイプと無農薬タイプは似て非なるものなんですが、まず取っつきは減農薬タイプ、肥料までは有機肥料で農薬は８５％減という、除草剤だけ使うというやり方をしていただいて、その後菜種だとかをつくっていただいて、その後大豆をつくって、大豆の後冬期湛水をします。大豆の後、上手に刈ったようでも大豆が落ちていますので、そこに水を張りますと水鳥がやってきます。水鳥がふんをしてくれます。燐酸の肥料を自然に供給してくれますし、畑地輪換をすると、田んぼの中のたくさんの種類が水田雑草から畑地雑草に変わりますので、翌年すごく無農薬栽培がしやすくなる。育む農業という言葉を使っていますが、農業の定義には、土地利用の形態の中で歴史的変遷を経てもうかる農業経営ができて初めて農業と言います。ヨーロッパの三圃式農業、二圃式農業もそうなんですけど、豊岡の場合も水田単作ではなくて、やはり土地利用をしっかりしてもうかる農業経営ができないと農業という言葉は恥ずかしいというふうなことをよく言われるので、やっぱりそういうことを推進していきたいと。そのために豊岡市さんは大豆について支援をしてくださったりしていますし、国の施策なんかも上手に使ってこの輪作体系にしていただいて、ありがたいことに、湿田の田んぼが圃場整備をされて乾田化されて、大豆をつくろうと思えばなとかつくれるような、そういう水田環境になっとるので、これをうまく利用できたらいいなあというふうに思いますけども。

でも、豊岡も、ここにたどり着くまでに７年ぐらいの歳月がかかりました。で、土地利用でも、やはり越前市に合った土地利用の仕方、越前市もやっぱりそういうふうなやり方、考え方があると思いますので、是非地域の英知を集めて取り組みをしていただけたらうれしいなあということを思っております。

○コーディネーター（山下裕己）　どうもありがとうございました。

まあね、７年かけて今のような、こういうふうなスタイルっていうのを考えられたそうなんですが、続いて田中さんにちょっとお伺いしたいんですが、福井県のですね、こういうふうな無農薬、無化学肥料とか、エコ農法というんですか、そういうふうな取り組みについてちょっとご紹介いただけますでしょうか。

○福井県農林水産部食の安全安心課（田中英典）

環境調和型農業の県とか国の動きということでございますけども、よくご存じのように、

平成１８年１２月に有機農業の推進に関する法律という、有機農業推進法と言っていますけどね、が制定されまして、これを受けまして１９年４月末、国のほうで基本的な方針が公表されております。

こういったことが、私は生かされると思うんですけど、平成１９年度からは農地・水・環境保全向上対策というようなことで､地域でまとまって農薬とか化学肥料を５割以上減らす、そういった先進的な営農地、これを応援しようということでありましてね、例えばお米であればですね､１０アール当たりそういう実施面積に対して国と県と市､市というんですかね、市、町がですね、６，０００円の支援をするというような制度がスタートをしております。

それから、平成２０年度からはですね、有機農業推進法を受けまして、有機農業総合支援対策というようなことで、有機農業ですね、こちらのほうは農薬、化学肥料を使わない営農ということなんですけども、そういった農業の拡大を目指してモデル的に取り組む地域ですね、そういったところを応援していこうということでございまして、もう平成２２年度から事業名が若干変わりましたけどね、趣旨は同様でございまして、今年コウノトリ呼び戻す農法部会さんのほうもですね、この事業にも応募されているように聞いております。

先般ですね、プログラムが承認されたというふうなことで国のほうから聞いてございますので、こういった事業でそういう農業を支えていこうっていうなことが始まっております。

県ではですね、２１年３月にですね、ふくいのエコ農業推進計画ということで、これはエコ農業ということなので、どんなもんかといいますと、農薬を全く使わないのがＪＡＳ有機ということでございますが、その手前の段階の、農薬、化学肥料を５割以上削減するという特別栽培、それから農薬、化学肥料を２割以上削減する計画を立てる農家を認定するエコファーマーっていう制度がございます。そういった２割以上削減する農産物、そういったものをエコファーマー農産物として、これら３つをですね、含めて、エコ農産物ということで、そういったものをですね、拡大していく計画ということで、エコ農産物の生産拡大、それから販売の促進、それとあとこういったことは消費者の理解がないとなかなか進めていけませんので、生産者と消費者の相互理解の醸成というこの３つをですね、基本目標として計画を策定して、エコ農業推進事業というようなことで２１年度から進めてございます。

基本的な考え方はですね、一気にこれ１００％までは増やす体制に持っていくというのは難しゅうございますので、一番簡単なですね、一番取り組みやすい２割減からですね、できるところから始めてもらって、徐々にレベルアップして進めていただこうというようなことで、こういった農業を進めていきたいということで考えてございます。

具体的にエコ農産物の生産拡大を図る施策としてなんですけども、今課題になっておりますのが、先ほど来ありますように、栽培技術では特に農薬を使わない栽培で雑草が問題になるというふうなことがございまして、これにつきましてはですね、兵庫県さんに比べると遅いんですけども、２１年からですね、農業試験場のほうで雑草の対策の技術の研究を始めております。科学的根拠に基づいて雑草防除ができるようにというようなことでの研究をスタートしております。

それからあと、実際に農薬、化学肥料を使わない栽培法をとられている農家さんにお話をお伺いしますとですね、非常に情報が少ないというようなことをどの方もおっしゃいますので、昨年からですね、専門講師による研修会をやろうというふうなことで、全国的にも有名、もう活躍されている有機農業の専門講師の方を招いてですね、勉強会を開催してございます。

それからあと、県内のですね、そういった農業に取り組んでおられる農家さん同士のですね、情報交換の場を持とうというようなことで、ふくいのエコ農業者ネットワークというものをですね、昨年の７月に立ち上げさせていただきまして、その場でですね、技術研修会とか情報交換会とか、そういったことを開催させていただいております。

これがですね、昨年の第１回を開いたときの、福井市のきらら館で開催したものなんですけども、いろいろとグループに分かれまして、いろいろ自分の抱えている問題点とか悩みとか、もうそういったものについての意見交換なり、またアドバイスをもらったりというようなことでの場を持ちました。また、実際に有機で取り組んでおられる農家の田んぼでですね、勉強会なんかも開催をしてございます。

それからあと、やはり情報が足らないという部分がありますので、取り組んでおられる農家の方のですね、栽培技術をですね、いろいろとお伺いして、事例集にまとめようというようなことでですね、今年の夏向きにですね、各農林総合事務所のほうでですね、地域でそういった農業に取り組まれている農家さんのところにお伺いしまして、情報をいろいろとお伺いしまして、それをまとめて事例集をつくっていきたいなということで取り組んでございます。　それからあと、収量が不安定、先ほど恒本さんのほうからもお話がございましたが、これにつきましては、こうやればたくさんとれるっていう体系的な技術っていうのがまだございませんので、地域地域で抱えている課題をですね、農林総合事務所のほうで実証圃という形でですね、農家さんと一緒になって技術の解決を図っていこうということでですね、これは今年からです。県下で７カ所の実証圃を設置しまして、当地区のコウノトリ呼び戻す農法なんかもですね、実証圃を設置させていただきましてね。今年取り組まれたのは、有機肥

料をどういうふうに使っていこうかということと、土壌の分析なんかをやりながらですね、施肥量なんかも決めていこうっていうふうな形の取り組みがなされたかと思いますが、そういったことを今進めてございます。

これはちょっと越前市の例ではないんですけども、この実証圃の設置につきましては、そういった技術だけを実証するだけでなくてですね、生き物がどのくらいそういった技術、栽培することで増えてくるんかというようなところをきっちり調べていこうというようなことで、これも農業サイドと農林総合事務所で普及指導員がこういった調査をするというのは今まで余りなかったんですけども、県の自然保護センターなんかでずっと勉強させてもらいながらですね、そういった農法に取り組んだ場合にどういった生き物が出てくるんだというなところをですね、調べながらですね、そういったことも情報として消費者に出していくのがいいんじゃなかろうかというふうなことで始めてございます。

ちょっとこれは敦賀、若狭町で実証もされたところで、こんなのが出てきましたよということなんですけども。丸印のところは減農薬タイプの農法を取り入れカエルが非常に増えたというふうなことで、ここに写真が載ってます。

それからですね、あとやはり有機につきましては、こういったエコ農業につきましては手間がかかるということがございますので、農薬もしくは化学肥料を使用しない栽培ですね、そういったことを行う農家の方にはですね、機械等の支援をしようというようなことで、水田の中古除草機とかですね、米ぬかのペレット成形機とか、そういった機械に対してですね、県のほうで２分の１の支援をさせていただく事業をですね、２１年度からスタートさせていただいてございます。

それからあと、エコ農産物についてですね、なかなか消費者の方に認識していただけない。今、こういったマークがあるわけなんですが、これはＪＡＳのマークです。これは県の特別栽培のマークです、エコファーマーのマークがあるわけなんですけども、こういったマークをですね、県内でのスーパーとか直売所とかですね、地場産のコーナーをきっちり設置してるようなところにですね、こういうエコ農産物を取り扱っていただいてるお店にこういったパネルをですね、置いていただこうというようなことで、昨年から取り組んでございまして、このパネルの下にはですね、こういったマークのついた農産物を買うと蛍とか、カエルとか、トンボとか、こういった身近な生き物の回復にもつながりますよというようなことをうたいながらですね、各お店に設置していただいているような状況でございます。丹南地区っていうんがですね、８店舗でこういったパネルを置いていただいております。

それからあと、こういった農業を、先ほど収量が非常に低いし、ある程度価格面での再生産価格っていうふうなことも西村さんのほうからお話がありましたけども、再生産価格で買っていただけるっていうふうなためにはですね、消費者にそういった農業についての理解をしてもらうことが大事なんで、そういったことをわかってもらおうというふうなことで、これも各農林総合事務所のほうでエコ農産物まつりとかですね、栽培、収穫体験というふうなことで、生産者と消費者が交流できる場を設けてもらいまして、取り組んでもらっているところでございます。

それからあと、エコ農業についてのご理解を図るのに、やっぱり子供ですね、小・中学校に通われている子供を通じて、また親にそういった農業への理解をしてもらうことがいいんじゃないかというようなことで、これは野菜カーテン運動ということでございますが、これはグリーンカーテンということでもいろんな取り組みがなされていますが、農業でやるので野菜カーテンというようなことで、これはゴーヤです。ゴーヤを小・中学校で育ててもらおうと。そして、エコ栽培で育ててもらって、そういった収穫物を実際に食べてもらったりしながらですね、環境、農業に対する理解をしてもらおうというふうなことで、これはですね、ＪＡさんに非常にご協力いただきまして、営農指導員さんがですね、各地域の希望される学校に出向いてですね、堆肥の入った土を持っていったり、地域のそういったエコ農業の説明をしながらですね、こういった野菜カーテンの設置にご協力いただきながらですね、また日ごろの栽培の指導なんかもしていただきながらですね､進めてきたとこでございまして、県下２８９小・中学校がございますが、２１年は７５校、２２年は１０５校というふうなことで、３年間で半分ぐらいの学校にやっていただけたらなというふうなことで考えていますんですが、おおむね目標達成ができそうな状況でございます。

こういったことを通じながらですね、エコ農業の拡大を図っていきたいということで考えております。

○コーディネーター（山下裕己）　ありがとうございました。

県のほうでもね、いろんな形の施策、事業を進めていらっしゃるようなんですが、今そういう意味では、そういうエコ農業、エコロジーというのがやっぱり大きなキーワードであるというようなところがよくわかると思います。

それでですね、実際そういうふうな国や県の施策がある中でですね、恒本さんが取り組んでいる中でいろいろ生産技術の関連とか、今もちょっとありましたけど、経済性の話とか、担い手とか、いろんな課題があると思うんですが、ちょうど兵庫県の方と福井県の方がいら

っしゃいますので、そういう方に対する質問みたいな意味でですね、質問のような形で結構ですので、そういう課題といいましょうかね、今ちょっとそうやって悩んでらっしゃることなんかありましたらちょっとお話し願えますでしょうか。

○パネリスト（恒本明勇）　はい、私のほうから。

雑草の繁茂で今つらい目をいたしたんですが、これが今年の田んぼの現状です。これは、まだ田植えして１カ月ほどのところだと思います。これから後、この今生えてないようなとこでもまた草が生えてきて、もう本当にさんざんな状況でした。これまで手を打ちいろんなことをして抑草といいますか、抑えてきたつもりはしていたんですが、こうした状況になりました。

それから、これはその前の、さっきの草が生えた前の状態で私が何か対策が立てられないかというようなことで、米ぬか散布とかいろいろあるんですが、どうしても生えてきたということで、チェーン除草といいまして、チェーンを田植え後、１週間ほどしているかと思いますが、引きずり回した。まだそれでも手に負えんということで、下の機械での除草機を回した。

よく今考えてみますと、よく言われるんですが、雑草の生えるポイントをつかんでいないなとよく言われました。この無農薬での栽培は、雑草の生えるメカニズムをよく理解して作業に当たらないと失敗するよというような話は聞いておりまして、これからこうしたポイントをとらえた作業をしていかなあかんなというふうな思いをしております。

地域の皆さんに私の田んぼを見ていただくと、わあ、これではできないやと皆さんおっしゃって、大変な状態の田んぼになりました。ちなみに私の収量は４俵ちょいというなところでして、６反ほどの取り分なんですが、３反の田２枚、非常に厳しいといいますか、生き物にとっては住みよかったんだろうなあと思っているんですが。これ質問、どうしましょう。

○コーディネーター（山下裕己）

今、恒本さんのほうから少し苦労話みたいな形も出ましたけども、それじゃですね、西村さんのほうに、豊岡のほうも最初はそういう意味ではいろんな意味での課題とかというのがあったと思うんですが、そういうとこをね、乗り越えてというか、克服して、育む農法というのはもう相当広がっているわけなんですが、そこら辺はどういうふうにしてこう広まっていったのかとか、恒本さんの少しちょっと不安に答えるような形も含めてちょっとお願いいたします。

○パネリスト（西村いつき）

これは豊岡で平成１４年から取り組んだ、時系列的にしたんですけど、例えばここの実証圃の試験圃の設置、これは１０アール当たり１０万円の県の事業費を使ってしたんですけど、もうこの時期は本当に失敗の連続でした。それこそ雑草のことや、虫のことや、土のことや、一から農家の方と、生き物のことを一から農家の方と勉強して、ああでもないこうでもないってディスカッションしながら、毎年課題を決めて、この課題を解決するためにっていうふうなことで試験圃を設置をして取り組んできました。

でも、毎年のように失敗をしまして、普及員がついて指導していながらあの田んぼは何ならっていうふうなこともよく言われましたし、私は幾ら何を言われてもいいんですけど、地元が豊岡なもので、私の実家の両親の耳に、あんたんとこの娘さんが指導してひどい目に遭っていたらしいなとか、そういうことを聞くとやっぱり両親は随分悲しい思いを当時はしたようです。

でも、今から思えば、そういう心配やいろんな人からの中傷やら批判やらがあったおかげで、それこそまたそれ以上に大勢の方の応援をいただいたりとかできましたし、その後、平成１８年から県の実証圃ということで１ヘクタール３０万、１０ヘクタール３００万の事業をとってきて、地域で技術確立をするというような事業の立ち上げができたりとか、失敗は必ず成功の種になりますので、本当にいろんなことを言われてつらい時期というのはあると思いますけど、それを乗り越えたら必ずいいことがありますので、その時期を頑張っていただきたいなあと思います。

育む農法の場合も、適正な雑草の処理の仕方、時期のポイントっていうのがわからなくて、先ほども写真にありました、除草機を入れれば入れるほど草がたくさん出てくるというようなことがありませんでしたか。

○パネリスト（恒本明勇）

それよ、この後すごかったですねえ。

○ パネリスト（西村いつき）

○ ええ。結局、雑草の種を土の下からこう掘り出してしまって、温度が高いので、本来だったら発芽しないはずの雑草がまた発芽してきて、もう草にもまれてというふうなんで、できるだけ除草機を入れずにするにはどうしたらいいかとか、でも冒頭言いましたように、掛け算の農法なので、それでも草が生えてしまったときに、適正にどういう対応をしたらいいのかっていうことを今コウノトリプロジェクトチーム試験研究に入っていただいて、この時期にこれだけの草の量があったらやっぱり除草機を入れないといけない

なとか、この時期にこれだけの草なら除草機を入れずにじっと我慢して稲の力に任せるのがいいよとか、そういう見きわめの技術確立をしていただいています。

そういう意味で、福井県の場合は試験研究も本当に全農で県を挙げて運営するっていうふうな体制をもう当初から組まれているっていうふうなことで、自分のときよりも随分準備が整っていると思いますので、今年の失敗を次の年の糧にして頑張っていただきたいなあと思います。

○ コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

それでは、県の田中さんほうですね、何らか県のそういう有機農法に対する支援体制のことでお話があればちょっとお願いします。

○福井県農林水産部食の安全安心課（田中英典）

先ほど申し上げましたけども、エコ農業者ネットワークとかでも毎回ですね、雑草の話が出ます。１週間雑草を中心にやってきているんですけども、ただ今年ですね、いろいろ情報交換されたり、いろんな県外の先生からですね、講師の方からですね、雑草防除の対策ミスですね､今西村さんがおっしゃったようなタイミングをどういったタイミングでやるという、そういったような情報を忠実に実行されて、非常にうまくいったというような報告も何名かの方からお伺いしていますので、そういったうまくできたという、どういうやり方したらうまくできたというような、そういった技術もですね。報告してもらえるような場をですね、エコ農業者ネットワークの中で今年また設定してみたいなというようなことで考えています。

それからあと、こういった農業は非常に大変やと思うんですけども、国のほうもですね、新しい環境保全型農業直接支援対策ということで、来年からの対策ということで、まだ概算要求が出てる段階なので具体的には申し上げられませんけども。

そういったことで、今まで以上にそういった取り組みに対して、農家さんを応援していくというような対策を、来年からスタートするというふうなことを聞いております。これは、今言われていますのが､国と県と市町でこういった有機的な農業に取り組む場合にはですね、農地・水では１０アール当たり水田の場合６，０００円やったんですけども、今度の新対策では、今概算要求の段階ですけども、８，０００円の単価での支援を考えているというようなことでございますので、そういったものもうまく活用しながらですね、やっていただいたらなということを考えています。

それとあと、普及も、非常にこういった農法について普及員にもバックアップ等をしても

らえると思いますので、いろいろ技術的な問題とかそういった場面では、農林総合事務所の普及指導員のほうにもご相談いただきながら進んでいただければなというふうに思っております。

○ コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございます。

恒本さんのこの実体験の中でですね、かなり試行錯誤とか、そういうなのをいろいろ今やっているような状況だと思うんですが、今西村さんとか田中さんのお話をお伺いすると、やはり行政もかなりこの環境調和型農業という農法を重要視していて、いろんなバックアップ体制とかそういうなのがあって、かなり綿密にされているような気がします。

それでですね、まだまだいろいろ課題があるかと思いますが、恒本さんがですね、呼び戻す農法部会のほうでですね、今後どういうふうに農法に取り組んでいくのか、そこら辺の今アドバイスなんかを受けたことも踏まえてお話しいただければと思います。

○ パネリスト（恒本明勇）

私どもも、この取り組む農法、無農薬、無化学肥料、経済性もそうですし、また生産技術なんかもまだまだこれからだと思っておりますし、地域の皆さんに広くこう取り組んでいただく、普及していただくっていうのにはまだまだ課題をたくさん含んでいるように思います。

どうか行政サイド、県や市などから私どもの取り組みにいろんなアドバイスとかいただけると、ますます皆さんも後押しされたような気持ちで取り組む可能性も非常に多いと思います。私どもの地域や、地域の子や、また孫といいますか、将来にわたってすばらしい環境を残すために、この農法をこれからも皆さんの仲間に声をかけていき、また協力者も得ながらどんどん増やしていき、コウノトリが舞うという究極の目標に向かって、我々仲間、そこに住まう地域の方々とまた協力しながら、話し合いをしながら今後進んでいきたいなという思いです。

○ コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

それじゃあ、実際この白山、坂口地区でですね、生き物をはぐくむ田んぼづくりというのを広めていってほしいわけなんですが、どうでしょう、田中さんと西村さんのほうからですね、そういう方々へのアドバイスとかですね、何か応援メッセージとか、そういうものがあればちょっとひとつお願いしたいんですが。

じゃあ、まず田中さんのほうからちょっとお願いできますでしょうか。

○福井県農林水産部食の安全安心課（田中英典）

ちょっとですね、エコ農業で先ほども言いましたけども、一番てっぺんというか、本当に大クラさんは一番てっぺんの、一番難易度の高い５人が麦にチャレンジされております。ただ、そういう環境に優しい農法ということになりますと、先ほども申し上げましたけども、まずはエコファーマーからでもですね、皆に声かけしてそれができましたら、次は化学肥料や農薬を抑えた特別栽培、ここにありますね、特別栽培、そして一番上の全く使わない無農薬とか無化学肥料というようなことで、段階的に地域の農家の方々ができるところから始めてもらえればなというようなことでやっております。

○　コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

では、西村さんのほうはどうでしょうか。お願いいたします。

○パネリスト（西村いつき）　私は、地元の方に是非お願いをしたいんですけど、結構県外の先生方とか学ばれて勉強されているってお伺い、もちろん先進的な地域だとか、県外の先生っていうの情報はくれると思うんですけど、でもこの地域の技術確立については、責任を持って最後まで対応はなかなか難しいと思います。地元の神様はありがたくないっていうのがあるかもしれないんですけど、やっぱり地元の関係者、普及センターだとか、農林事務所だとか、試験研究所だとか、あとここには何十年も有機農業で頑張っておられる仲間の方がいらっしゃいますので、是非その方たちを大切にして、一緒にそれこそ取り組んでいただくっていうのが一番大事かなと思います。

これは兵庫県で私たち県の職員が豊岡のためにいろんな事業を組んで、県からお金を取ってきてやった事業です。本当に最後まで責任を持ってやりました。だから、そういうふうなことをしないと､なかなか地域でしっかりとした支援はできないんじゃないかなと思います。

あと、私今回の活動から学んだことっていうのがたくさんあるんですけど、その中で、もうちょっと時間がないので１つだけ皆さんにお伝えしたいんですけど、日本は言霊の国、言霊の幸ふ国です。人というのは、言葉が行動を左右するそうです。人間の前頭葉っていうのが一人称で、人の悪口を言っても、あと後ろ向きなことを言っても、全部自分に返ってくるそうです。多分、今年いろんなご苦労をされて、しんどいだとか、大変だとか、やめたいだとか、またいろんな方からいろんな批判を受けられると思うんですけど、それは絶対前向きには進まないと思います。どんなにしんどくっても、ああいい勉強をさせてもらってありがたいなというようにすべてのことに感謝をして、前を向いて進んでいただけたら必ず道が開

けると思います。努力の先には光がありますので、できるだけ後ろ向きなことは言わずに、仲間のうちでも、また周りからも後ろ向きなことは言わずに頑張っていただきたいなあと思います。私も豊岡の出身なので、とっても根暗で後ろ向きですけど、できるだけそういうことを言わないように言わないように努力をしてきましたので、是非皆さんもそういうふうにしていただけたらうれしいなあと思います。

あと、コウノトリって、昨日も松島の会長さんもお話しされましたけど、とっても不思議な鳥です。コウノトリは、優しく見守ってくださる心のないところには行きません。巣塔を建てても、こんな巣塔を建ててもらったら農薬や化学肥料を使えなくなるっていうふうに苦情が来た途端、そこの地域にコウノトリは行かなくなって、地域の中で一生懸命話し合いをして、いろんな議論をして、シカやイノシシよりもコウノトリのほうがまだましかって集落の方が了解してくださったら、その１週間後にそこの巣塔に来たっていうような不思議な話もあるぐらい不思議な鳥です。人の心がわかるんじゃないかと思うような鳥です。

あと、もうだめだっていうふうにあきらめそうになると、不思議と勇気やチャンスをくれる鳥です。今年も、皆さんお米づくりでさんざんご苦労されて、それでもえっちゃんが来たらちょっと頑張ってみようかなっていうふうに思われたんじゃないかなと思います。

あと、人って楽しいから一生懸命にやるんじゃなくて、一生懸命にやるから楽しいんだよっていうふうなことを教えられたことがあります。きっと恒本会長もいろんなご苦労をされていますけど、本当に一生懸命されているからある意味生きがいだったり、使命感だったり、また楽しみだったり、そういうものがあるんじゃないかなと思いますので、そういう経験や思いをまた一人でも多くの方に広めていただけたらなというふうに思います。

あと、縁をつなぐ力があります。私も越前市に何回か来させていただいて、ここの地域がとっても好きですし、応援団、ファンの一人ですので、これからも末永くこの縁を大事にして応援をさせていただきたいなというふうに思っています。

○ コーディネーター（山下裕己）

ありがとうございました。

あれですかね、発言の理想はですね、いろいろ試行錯誤を重ねるうちに、ある人から今回も失敗しましたねという話を言われたときに、いや、これでは失敗だということを発見したんだというふうなね、何か前向きな考え方をしていたという話をちょっと聞いたことがありますが、それに似たような今お話だったかなというふうに思います。

それではですね、ちょっと時間のほうになりましたけど、会場のほうでどなたか質問があれば、西村さんなりとかでも何かおっしゃることがあれば。

○コーディネーター（山下裕己）

西村先生にお伺いしたいんですが、一番、農業の省エネ化っていうことになると、湛水直まき、しかも不耕起による湛水直まきっていうのが一番省エネだ。しかも虫も増えると。そういうことで、そういう方法はとれるんでしょうか。というのは踏ん張れば草も生える、そういうふうな考え方をちょっとしているんですわ。というのは、私６０年間白山で農業しているんですが、最終的にはそういうところに行き着くかなあという感覚を持っています。

○コーディネーター（山下裕己）

どうでしょうか、西村さん、今のご質問に対してちょっとお答えいただけますでしょうか。

○パネリスト（西村いつき）

豊岡でも、平成１５年から不耕起の試験をしています。冬期湛水をして、うまくいけば普通の田植え機で不耕起が可能です。でも、これも育む農法以上に掛け算の農法で、どれか一つゼロがあるとなかなか収量的にも満足がいかないというところがあります。あと湛水直播も完全に無農薬ではないんですけど、冬期湛水と組み合わせて豊岡でも試験をしていまして、これも結構本当に、先ほど発言がありましたように、省力的ですし、収量的にも遜色のない収量がとれた年もありますので、やはりこれはと思われる技術があればきわめていただきたいですし、またそういう情報をいただきたいと思って、私は個人的には将来不耕起の技術が広がるんじゃないかな、そういうふうにしていかないとだめじゃないかなと個人的には思っております。

○　コーディネーター（山下裕己）

どうもありがとうございました。

大体予定の時間を過ぎましたので、最後にちょっと一言申し上げたいと思うんですが、今日のパネリストの方とですね、事前にお話をしたとき思ったんですが、兵庫県もそうですし、福井県もそうですし、いろんな農業試験場とか研究機関でですね、今こういうふうな環境調和型の農業についての課題について研究を盛んにしていらっしゃるそうです。そういう情報というのはですね、当然いろんな自治体に、それに取り組んでいらっしゃる方に幾らでも提供はするし、もしいろいろ聞かれればそれに十分できる範囲で答えたいというふうな話をなされていました。

そういう意味ではですね、非常にいろいろ不安もあるでしょうけども、かなりバックアッ

プ体制というのは進んでいる。それも、全国的なネットワークも各都道府県の方なんか持っていらっしゃいますし、そういうことは惜しみなく情報提供をしていただけるという話をお聞きしましたので、そういう点を含めましてですね、このコウノトリ呼び戻す農法というのはですね、今後ですね、一歩ずつでもいいですから、皆さんの中でですね、広まっていくと、今回シンポジウムを開いた意味はあるのかなあと思います。

それに、昨日のシンポジウムを含めてね、１つ気づいた点は、コウノトリ育む農法とか呼び戻す農法とか言っていますけども、単なる農業技術の話じゃないなあっていうのが大きなことだなというふうに思います。それは、当然教育的なことだとか地域の地域づくり活性化のことだとか、いろんな意味合いがあるということがこの２日間のシンポジウムの中で感じていただければ、この大作戦は成功の一つじゃないかというふうに思います。

ちょっと時間は５分ほど過ぎましたけども、パネリストの方にいろんな話をお聞きできて今日は非常にいい機会だったと思います。どうもありがとうございました。

○司会　ありがとうございました。

西村先生の言葉に、まず敵を知りましょう、草の性格を知りましょうとございました。私たちは、もっともっと勉強する必要があるなと感じました。

そして、米づくりとあわせて、生き物をはぐくむ農業がコウノトリが舞う里には絶対に必要でして、また私たち人間が生活するのってとっても大切であることを改めて実感いたしました。

本日のコーディネーター、パネラーの皆様、ありがとうございました。

「食の文化祭」

11月7日（日）１０：３０～１３：００

10:30～　ミニ講演「里山の食文化と農村活性化について」

民俗研究家　結城　登美雄氏

11:00～　食の文化祭（手作り料理の持ち寄り会）

12:30～　講評

■ ゲスト

結城　登美雄　氏　（民俗研究家、宮城教育大学非常勤講師）

1945年、山形県生まれ。民俗研究家。山形大学卒業後、広告デザイン業界に入る。(有)タス・デザイン室取締役、宮城教育大学非常勤講師。宮城県宮崎町「食の文化祭」、同県北上町での「みやぎ食育の里づくり」などのアドバイザーとして地元学に取り組んでいる。現在は、「鳴子の米プロジェクト」などに関わる。

2004年芸術選奨文部科学大臣賞受賞（芸術振興部門）。

主な著書：『山に暮らす海に生きる』（無明舎出版）、『スローフードな日本』（『増刊現代農業』など多数。

食の文化祭に出展された地元料理

民具の展示も行われた

仁愛大学の販売コーナー

「食の文化祭」に集まったお料理たち

焼き鯖の炊き込みご飯	柔らか玄米(コウノトリ支局米)
水ようかん	簡単豆腐
大根菜めし	沢庵のうま煮
ミョウガの甘酢漬	筍のおかか和え
小芋のにっころがし	ごま和え
ずいきの「すこ」	五目煮
なんばの葉の煮物	胡瓜のからし漬け
冬至南瓜	ゴーヤの佃煮
さつまいものみぞれあえ	たくあんのうま煮
大根のえごま和え	長寿なます
きゅうちゃん漬物	梅干
かぼちゃのシフォンケーキ	大根葉のみそあえ
昆布煮シシ肉	山菜福神漬
ブリオッシュパン	菊花カブ
スコ	「しらやまポーク」の角煮
冷凍ワラビのしょうが漬け	黒豆ごはん
かぶの千枚漬風	大根菜の炒り煮
金時豆	ぜんまいの白和え
ゼンマイの白和え	かぶらの甘酢漬け
ふわふわ蒸しパン(2種)	ならづけ
里芋のみの煮	センギリのにたの
ぜんまいのふくめ煮	へしこの押し寿司
ぜんまいの白和え	ベジタブルピザ
ぜんまいと豚肉のいため煮	ぜんまいのあいもの
五目豆	たくあんのにたの
はやとうりの奈良漬け	ゴーヤの佃煮
むかごのゴマあえ	手作りみそとしらやまのごはん
芝栗	

「コウノトリが舞う里づくり大作戦」大会宣言

里地里山の自然は、日本の農耕（稲作）文化と共に、人が手をかけ守ってきた

自然です。

そこには、これまで多くの生き物が棲んできました。

昔は、私たちの周りに生き物がいるのが当たり前でした。

昔ながらの当たり前の田や畑づくり、山仕事が、生き物を守ってきました。

コウノトリは、これらさまざまな生き物たちの頂点に立つ生きものとして、かつては、この地域の大空を羽ばたいていました。

しかし、社会や経済の進展に伴い里地里山の利用価値が低下し、人の手が加わらなくなりました。

当たり前にしてきた田や畑づくり、山仕事も、農家の高齢化や担い手不足で続けていくことが困難になりつつあります。

その結果、多くの生き物が絶滅の危機に瀕しています。

そして、昭和４６年、日本の野生のコウノトリは、絶滅しました。

田や畑や山などの里地里山に生き物を戻したい。

お百姓さんや山で暮らす人々に元気になってもらいたい。

未来を担う子どもたちに豊かな環境を残したい。

それが私たちと、里地里山に棲む生き物たちの願いです。

生き物と私たちは一心同体です。

私たちは、生き物たちと共にすごし暮らせる里地里山を再び取り戻すために、これからも里地里山の保全再生に努めます。

そして、私たちは、里地里山が生き物の宝庫である事を誇りとし、子孫に残し、本日の「大作戦」の願いである「再びコウノトリが舞う、人も生き物も元気な里づくり」のために、一人ひとりができること、地域でできることを、今日から始めそして、多くの仲間に広げることを宣言いたします。

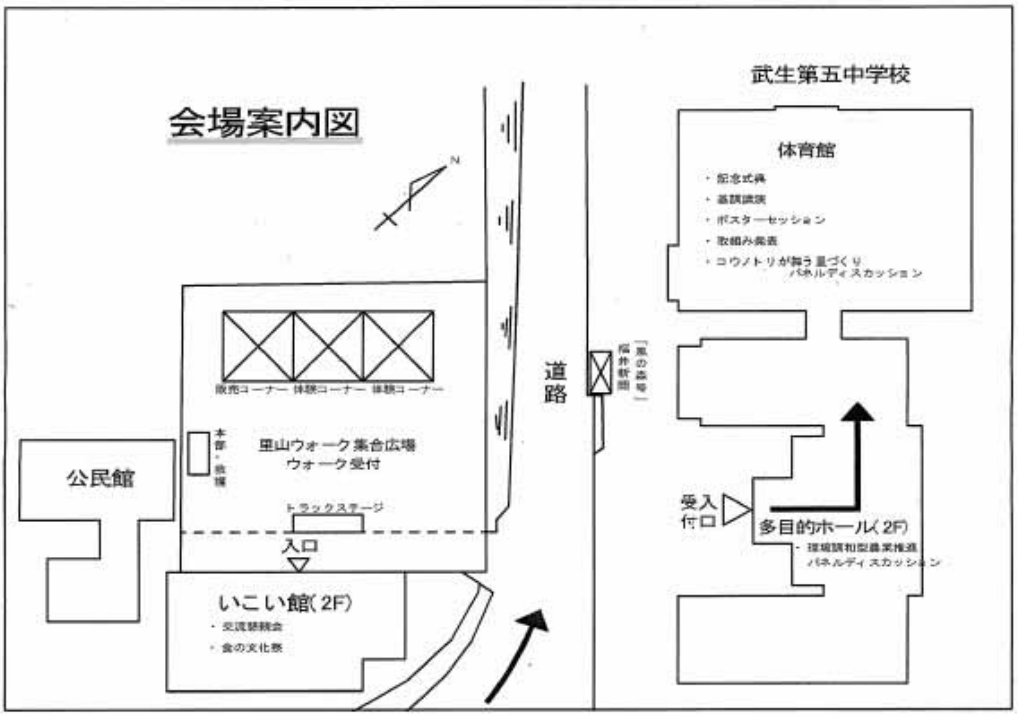
平成 22 年 11 月 6 日

コウノトリが舞う里づくり大作戦　参加者一同

「チラシ」

「コウちゃん」飛来40周年記念
コウノトリが舞う
里づくり大作戦
11月6日(土)7日(日)
福井県越前市 武生第五中学校周辺
コウノトリ「えっちゃん」
11月6日
10:30～ (10:00受付) 里山クイズウォークラリー 野外
13:30～ (13:00受付) コウちゃん飛来40周年 記念事業開会式典
14:30～ 基調講演 兵庫県 中貝豊岡市長
15:30～ ポスターセッション 五中体育館
15:50～ 取組み発表
16:20～ シンポジウム テーマ「コウノトリが舞う里づくり」
18:00～ 交流懇親会 いこい館2F
サイドイベント
12:00～ 17:00 販売ブース 焼きそば、おにぎり、そば、たこ焼き 体験コーナー 竹細工、巣箱作り、プチ米俵作り、わら細工 他 いこい館前駐車場
通日 展示 展示発表 バードカーヴィング コウノトリ 五中体育館
11月7日
9:30～ シンポジウム テーマ「コメ作りと生きものを育む田んぼ」 五中多目的ホール
10:30～ 食の文化祭 いこい館2F
コウノトリ「コウちゃん」
主催 コウノトリ「コウちゃん」飛来40周年記念事業実行委員会
共催 越前市・福井新聞・NHK福井放送局
後援 環境省中部地方事務所、福井県、豊岡市
お問い合わせは
コウノトリ「コウちゃん」飛来40周年記念事業実行委員会
事務局 水辺と生き物を守る農家と市民の会
TEL/FAX 0778-29-2811
この印刷物は、セブンイレブン記念財団の支援を受けて作成されています。

コウノトリ「コウちゃん」



コウノトリ「コウちゃん」飛来40周年記念事業実行委員会
【事務局】水辺と生き物を守る農家と市民の会
福井県越前市都辺町36-84　しらやまいこい館内
TEL/FAX 0778-29-2811
ホームページ http://www.abechan.org/

コウノトリ「コウちゃん」飛来 40 周年記念事業

「コウノトリが舞う里づくり大作戦」ステージ 2　報告書

平成 23 年 3 月発行

編集：水辺と生きものを守る農家と市民の会

発行者：水辺と生き物を守る農家と市民の会

〒915－1204

福井県越前市都辺町 36-84　しらやまいこい館

TEL：0778－29－2811

URL：http://abechan.org/

Mail：mizubenokai_ikoikan@yahoo.co.jp